

Title	チャモ口語の研究
Sub Title	
Author	松岡, 静雄(Matsuoka, Shizuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.2 (1926. 5) ,p.33(187)- 110(264)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260500-0033">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260500-0033</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# チャモロ語の研究

## 一、緒言

チャモロは我南洋廳管下の委任統治地中、最日本に近い小笠原島の南方につづくマリアナ群島の住民の呼稱である。此種族は其容貌、體質、言語、風俗から見ても南方の隣人カロリン群島民（ポリネシア系と稱せらる）とは異つた獨立の民族であるが、其系統については今日までまだ定説がない。スペイン人の著書にも或はタガル族（フィリッピン土人）の支族であると説き、或はポリネシア系であらねばならぬというて居る。或はマレー人種に屬すといひ、日本人、メキシコ人の混血ととくものがあり、グアムの土人は自ら日本人の後裔と稱して居るとのことである。チャモロといふ名稱についても邦語サムライ（土）の轉訛であるといふ説もあるが、頭を剃る習慣があるのでポルトガル人が坊主頭即ち Chamorra（スペイン語 Chamorro）といふ名を與へたのであるといふホーゼ・モンテロイ・ヴィダルの説が真に近しやうである。

ゼスイト教徒の報告によれば此群島の人口は一六六二年には十萬を超えて居たといふことであるが、他の太平洋諸島に於て見るが如く、白人と接觸後著く減少して、スペイン統治時代の末年(一八八六年)には僅に九、七七〇人となり、現時我支廳の所在地となつて居るサイパン島の如きは全住民八四九人中カロリン人が三分の二を占めて居るといふことである。チャモロ人が激滅したのは勇悍にスペイン政府及基督教に反抗して討滅、放逐の憂目に逢うた爲で、獨逸統治時代にはグアム島から復歸するものが多く、稍人口を増したけれども昔日の繁榮は再見ることが出来なくなつた。現在チャモロ人の最多く棲息して居るグアム島は米西戦争の結果アメリカ領となり、獨逸の手には渡らなかつたので、我國の治下に收められたチャモロ人は上記のサイパン島を始め、ロタ、チニアン、バガン、アグリガンの諸島に散在して居るもの、並に西カロリン群島のヤップ島に移住したものを加へても二千名を超えぬ。其もやがては新來の内地人、沖繩人等と混血、同化するか、然らざれば自滅するの外はあるまい。せめて今のうちに此特異な民族の言語、風習を記録して置きたいといふのが我等の切なる希望である。

チャモロ語は其構成からいへば明にマレー・ポリネシア語系に屬するものであるが、發音及個々の語は南隣のカロリン、ブラウ語と大に相違して居るのみならず、或る語、就中代名詞の如きは邦語と趣を同うするものがある。他日我國に言語學が勃興して、臺灣土語からタガル語へと研究が進んで行くやうになつたら、チャモロ語も亦重要な關鍵であらうと思ふので、私は今此語が全く消滅するに至らぬ間に手

をつけて置かうと志したが、参考書を求めることが困難で、漸く教父 Calistus の "Chamorro Wörterbuch" (一九一〇年刊行) 一冊を手に入れたのみであつた。其序文によるとチャモロ語に關してはスペイン僧 Jose Palomo の記録、並に米國の人類學者 *W. G. Peck* の著作があるといふことであり、其後にも獨逸、米國あたりで刊行せられた書物があるだらうと思ふが、私はまだ之を見る機會のないことを遺憾とする。

カリスツス師の辭書には卷末に簡単な文法が添へてあるが、同書の目的は序文にもある通り、歐人がチャモロ語を學び、チャモロ人が獨逸語を學ぶ便利の爲に實用を主として編纂せられたもので、學術的研究ではないから、此文法の如きも西洋の語法にあてはめてチャモロ語をといたといふだけで、チャモロ語に備はる原則を明にしようとしたのではない。其故に獨逸語を知つて居るものには之によつて略々チャモロ語の面影を髣髴し得られるかも知れぬが、其真相は曖昧模糊である。此はインド・ゲルマン語と之に屬せざる他の語系との根本の相違に由來するもので、恰も國語を西洋文法に當嵌めて説いた結果わかり易くなつたやうではあるが、邦人の國語に關する智識が日を追うて減退するのと同じ理由である。さりながら説明は當を得ぬとしても、カリスツス師が與へてくれた材料は尊重すべきものであり、其語彙と會話篇とはチャモロ語の構成を明にするに十分であるから、私は之によつて此一篇を草したのである。チャモロ人から直接に得た智識ではないから、原著者の誤解を其儘踏襲した場合もあらうし、

私の説明の不完全な點も少くはあるまいと聊か不安を感ずるのであるが、いつまで待つたとして私一人の力を以て此研究が完成しようとも思はれぬので、自ら陳勝吳廣たることを甘んじて、世の篤學者の奮起を促さんとするのである。

私は上述の理由に基いて此一小篇の發表をいそいだのであるが、せち辛い世の中ではこんな世間ばなれのした研究を歓迎せず、餘計なことをするといはぬばかりの取扱をうけたのを、本誌の編輯者に拾ひあげられたのである。私は自分一個の立場としても、滅び行くチャモロ族の爲にも、或は又我國の文化の上からも編輯者諸君の此寛容を心から感謝せずには居られぬのである。

## 二、文字及發音

**文字。** チャモロ人には固有の文字はない。少くとも西洋人が此民族を發見した當時は文字といふものを用ひては居なかつた。其故に西洋人はローマ字を以て此語を寫し、土人も亦之を學ぶやうになつたのであるが、ローマ字が果してチャモロ語を寫すに適當な記號であるかは大なる疑問である。例へばアス(冠詞)、アトフ(草葺屋根)といふ語を *as, atof* とかき現はす場合、我々は先づ上記の *ス*、*フ* が *s*、*f* のやうな子音ばかりの音であらうかと考へて見ねばならぬ。私の見る所ではチャモロ語は邦語と同様に、母韻を伴はぬ子音が單獨に發音せられることがない。換言すれば個々の子音及母韻が集まつて音節

をなし、音節から語が出来て居るのではなく、不可分の成音（我イ、ロ、ハの如き）を單位とするのである、其故に正しくは *asu*, *atofu* と綴らねばならぬのであるが、此のやうにア、イ、ウ、エ、オの外すべて成音を二つの記號で寫さねばならぬのは頗る手數のかかることである。西洋人の立場からいへば面倒であつてもさうする外仕方がないのであるが、我國には成音を寫すに調法な假名といふものがあるから之を用ひればよいと思ふ。

世の中には國語の音をあらはすに態々ローマ字を用ひ、或は假名をやめてローマ字を採用せよと主張するものがある。彼等はローマ字でかけば發音が遺憾なくあらはれると考へて居るやうであるが、本家の西洋ですら其んなことは望めぬので、別に發音符号フォネチックサインを設けたのであるが、其とても西洋人の頭から案出したものであるから、太平洋島民の言語を寫すに間然する所がないと斷言し得られぬやうに思ふ。勿論我假名にも缺點はあるけれども、二三の特別記號を用ひたら、其不備を補ひ得ると信ずるので、本篇では已むを得ぬ場合の外、ローマ字を用ひぬことにした。

**母韻。** チャモロ語の母韻は國語の如くア、イ、ウ、エ、オの五種に限られて居て、英語の *a*, *i*, **獨逸語の *ä*, *ö*, *ü* のやうな韻はない。** 母韻の長短伸縮も邦語と同じことで、別に定まつた規則はなく、口調によつて色々にかはるのである。

母韻の重疊することはあり得るが、西洋語の重母韻ダイフツングのやうに二つ以上の母韻が重なり合つて特別の母

韻を生ずること——例へば eu がオイと發音せられ、oo がウとなるが如き——はない。其故にローマ字で綴ると重母韻のやうに見える場合にも第二の母韻は別の音節をなすのである。例

リイ (Ei) 見。 タイタイ (Taitai) 讀。 アア (aa) 欠伸。 オオ (oo) 呑。

ウウス (Eus) 甘蔗の皮を齒でむくこと。

同じ單母韻が重疊することは右の三例しか見當らぬが、接合又は熟合の爲に、成音の次に同じ單母韻が重なることは屢あり得る。例

ハ(彼) ア(互) ソダ(會) || ハアソダ 行逢ふ

邦語と同じくチャモロ語でも昔は母韻の重疊を避けたと見えて熟合の場合に兩語の間にンを挿入したものがあつた。例へばファ(爲)、オماغ(浴)、アン(場所)を結合した浴場といふ語はファンオマガンと發音せられるのである。又同じ場合ア、イ、ウ、エ、オをヤ、イ、ユ、エ、ヨに變ずることが多い。上例のリイ、タイタイのイもヤ行のイであつたらうと思はれるが、イと yi、エと ye とはまぎれ易いから區別がつかなくなつたのであらう。

イとエ、オとウとは相通ずる場合が多い。之は基本母韻がア、イ、ウの三音のみで、エとオとが後から加はつた故であらう。國語も昔は三母韻であつたのではなからうかと思はれる。オ韻が動詞の活用に加はらぬことも其一證であるし、イとエとを混合する方言の範圍は可なり廣い。朝鮮語にはエといふ母韻

がなく、琉球では内地語の影響により一時はエ、オ韻を備へて居たらしいけれども、今では全く三母韻である。

成音。 チヤモロ語の成音は左記の如く略々我假名を以て表現することが出来る。

清音

濁音及半濁音

拗音

カ行 カ キ ク ケ コ ガ ギ グ ゲ ゴ

サ行 サ シ ス セ ソ

タ行 タ チ ツ テ ト ダ デ ヅ デ ド チヤ チイ チュ チェ チョ

ナ行 ナ ニ ヌ ネ ノ

ニャ ニイ ニュ ニエ ニョ  
ナ ニ ヌ ネ ノ

ハ行 ハ ヒ フ ヘ ホ

バ ビ ブ ベ ボ  
ピ プ ペ ポ

ファ フイ フ フエ フオ

マ行 マ ミ ム メ モ

ヤ行 ヤ イ エ ヨ

ラ行 ラ リ ル レ ロ

備考

(一) サ行の濁音といふものはない。sといふ音を用ひるスペイン語を流用する場合にも之をsにあらためて發音する。

(二) ナ行拗音中ゴシック字で示したものは發音符字ヲを以て表現せられる音で、ガ行と同一發音位置を以てする鼻音である。英語のngよりも多く鼻へかかるからガ行よりも寧ろ普通のナ行に近い。我國でも昔は此音があつたらしく、のといふ助語は次のやうな變遷によつてがともいはれるのである。

ノ(no) — ナ(na) — ナ(na) — ガ(ga)

今日でも「檀那」<sup>ダンナ</sup>「反應」<sup>ハンキョウ</sup>などいふ語に於て此音を聽取するのであるが、現在の假名を以て表現することが出来ぬから、本篇では常に肉太字を以て之を區別することにした。

(三) チャモロ語のラ行はローマ字でかけばrであるが、外來語に在つては原音に従つてrと發音する。例へばスペイン語 *razón* (道理) のラは舌端を振動させて發音する。

邦語のラ行は振動の少いrであるといはれて居り、「べらんめい」語に於ては確にさうであるが、昔はrではなかつたらうか。方言には今でも側音即ちrと發音せられる例が多く、朝鮮語ではr、l相半するのである。

右の外カリスツス師の説によれば音節の終等に於て明瞭に出氣音(*aspirato*)が聞える——例へばサイ

ヤン(舟)は *shyan* である——といふことであるが、假名を以てしては之を譯することは不可能であるから、假に伸音符を傍書して之を表示することにする。例、サヤーン。

外來語——主としてスペイン語——の *v* は *ri* と發音し、又音節の終にある *i* 及 *r* は邦音「骨」「達」のツのやうに發音する。例

*salvation*——*sabation* サツバシオン(救濟)

*puera*——*potta* ポッタ(戸)

此變化は邦語と朝鮮語との間にも起つたことで、漢字「骨」「達」は朝鮮に於ては *kor*、*tal* と音譯せられたが、我國に來るに及んで *ko*、*ta* となつたのである。

スペイン語には *bl*, *br*, *cl*, *er*, *fr*, *gl*, *gr*, *pl*, *pr*, *ps*, *tr* のやうに子音が二つ重なつたものが多いが此等の語を其儘用ひる場合にもチャモロ人はブル、クル、グル、フル、ブル、プス、トルの如く二成音として發音する。我國に於てもステーション、トラムプ等はハイカラ連を除いては *stition*, *teramp* とううて居るのである。

撥音。チャモロ語の子音は上述のやうに獨立して(母韻を伴はずして)用ひられることはないのであるが、唯マ行、ナ行、**ナ**行の發聲、即ち發音符字 *m*, *n*, *ŋ* を以て表はす子音のみを除外例とする。

私は之を撥音とよぶことにする。此三者の發音を説く爲には之に相當する邦音について少しく辯明を加

へねばならぬ。

邦語には本初撥音というものがなかつたのであるが、漢字を音譯するに當り、參(ᄃᄃᄃ)、散(ᄃᄃᄃ)、桑(ᄃᄃᄃ)等を區別する必要を生じた。我等が祖先は色々と考へた擧句、參をサム、散をサヌ(又はサニ)、桑をサウ(和行のウである)としたのであるが、後世ニを變形してンといふ字を作り、參にも散にも充當した結果、兩者の區別が不明になつたのみならず、ンの撥ね方が段々強くなり、ㇿに近く發音せられるやうになつた。徳川時代の音韻學者は大に之を苦にして唇内、舌内、喉内の別を立てたけれども、日本化した漢字音をもとに復へすことは出来なかつたばかりではなく、之を表現する方法については何等の新案もあらはれなかつた。其故に上記の三音を假名を以て表示するには次の通りにする外はないのである。

n	m	
ン	ム	
} 右側へよせてかく。例		
}	サム	(口鬚)
}	ポン	タン(熟した椰子の實)

此音は往々に近く聞えるので、西洋人も或はnとし或はmを譯することがある。

ㇿ 邦語に同じ、但しやゝ多く鼻にかかる。

音節。上記の母韻、成音及撥音は西洋語の音節といふものに相當する。西洋語には閉音節というて

mas, kol などのやうに二つの子音の間に一母韻の介在するものを以て一音と見ることがあるが、チヤ

モロ語では既述のやうに子音の獨立を許さぬから、右のやうな場合はあり得ぬ。或はダンダン（鳴鐘）、マン（火山）のダン、マン等を一音節であると主張するものがあるかも知れぬが、其は西洋文法に捉はれた説で、正しく二音節である。チャモロ語には一撥音から成る單語はないけれども、隣民族のブラウ語では「有」といふ語である。——アイヌ語及沖繩語でも有をアンといふことは偶合かも知れぬが、注意を要することである。

（註）音節の分解は本來發音の便宜上から起つたものであるから、ローマ字でかきあらはした場合、西洋風に音節をわけることについては私は異存がない。さりながら接合又は熟合語にあつては餘ほど注意せねばならぬ。例へばウオ、ウアン等の接合する語は常に其前で音節を分たねばならぬ。即ち *Cháguan*（草木）は *Chá-guan* ではなく、*Chá-guan* である。

**抑揚。** 一語中の音の抑揚、即ちアクセントについては劃然たる規則がないから、一つ一つの語について習得するの外はないが、大體に於て次の如くいひ得る。

- 一、邦語と同様に餘り目立つた抑揚はない。
- 二、接合及熟合語に在つては主語にアクセントを置く。
- 三、多くの場合接頭語を冠して居るから、其次にアクセントがあると思へば大差はない。

### 三、音 便

「語の意味を修飾變改する爲ではなく、單に發音の便宜上音をかへることを古來音便オンビと稱へる。音便は之を音の類化 (assimilation) と延約 (Insertion and contraction) とに分ち、類化は更に母韻の類化と子音の類化とに區別することが出来る。我國では前者を同行變化、後者を同列變化と呼びなれて居るから本編でも此呼稱を用ひる。

**同行變化。** 既述のやうにイとエ、ウとオとは屢相通ずるが、之は音便によつて起るのではなく、寧ろ本初エがイから、オがウから出たことを證するものである。眞實類化と稱すべきは左記の場合オがエに、ウがイになることである。

一、イといふ定冠詞を用ひた場合次に來る成音の母韻に於て。例

チヨッダバナナ — — イ チェッダ

ブグア檳榔子 — — イ ビグア

二、語頭屈折 (inflection) の結果イ韻が出現したとき其次の母韻に於て (第 )。例

ロカ高 — — ロロカ — — リノカ — — リネカ高

語頭のアはイに變ずることがある。此場合次の母韻も亦上記と同様の類化をうける。例

アログ謂 — — イログニヤ — — イレグニヤ彼謂

アは亦語尾變化に際し其類化をうけてオに近く發音することがある。例

フアラダグ(赴)——フスロゴ(逸)

**同列變化。** マ行とフア行とは常に同列に於て相通ずる(邦語に於てマ行とバ行とが相通するのと趣を同うするものである)。例へば複数を示す接頭語マは時としてはフアとなり、他動を示すフアは屢マとせられる。又一語でフア行マ行兩様に發音せられる語も少くはない。バ行もまたフア行となることがある。

右の外接合又は複合の場合には次の如き變化が起る。

カ行はナ行となる。例、キリスマノ(基督教徒)——マニリスヤノ(同、複數)

サ行又チャ行はニヤ行となる。例、サケ(盜人)——マニヤケ(同複數)。チェロ(兄弟)——マニエロ(同複數)

タ行はナ行となる。例、タイライエ(惡漢)——マナイラエ(同複數)

パ行はマ行となる。例、バレ(教父)——ママレ(同複數)

語頭屈折の結果、或母韻が現はれる場合には、次に來る子音は其何たるを問はず次の如く類化する。

(イ) ウ韻が現はれる場合にはマ行。例 タイタイ(讀)——ツマイタイ

(ロ) イ韻が現はれる場合にはナ行。例 ファチナス(爲)——フィナチナス

代名詞(接合形)が語尾に接着して所有代名詞となる場合には特に左の如き變化を生ずる。

ハ(彼)——ニヤ。例 タタ(父)——タタニヤ(彼の父)

シハ(彼等)——ニイハ。例 ナナ(母)——ナナニイハ(彼等の母)

延言。延言即ち音便の爲に語中に或る音を挿入することは次の如き場合に行はれる。

一、母韻を以て始まる語にイ又はウを接頭する場合にはン又はムを挿入する。例

アナコ(長)——<sup>○</sup>イン<sup>○</sup>アナコ(長さ)

エンナロ(中間)——<sup>○</sup>ウム<sup>○</sup>エンタロ(介在)

二、バ行、マ行又はガ行を以て始まる語にファ及マといふ接頭語を冠する場合にはンを挿入する。例

ガガウ(請)——<sup>○</sup>ファン<sup>○</sup>ガガウ(祈)——<sup>○</sup>ファン<sup>○</sup>マン<sup>○</sup>ガガウ(同複數)

三、母韻を以て終る語に所有代名詞マメ(我等)、ミヨ(汝等)、ニイハ(彼等)を接尾する場合には往ヤン

を挿入する。此ンはナ(我助語の)に相當する語の變形したものであらう。例

タタンニイハ(彼等の父) ナナンミヨ(汝等の母)

四、母韻を以て終る語の次に母韻を以て始まる語が來る場合は後續語をヤ行に改めることがある。例

イネ(此)、ギ(に)——<sup>○</sup>ギ<sup>○</sup>イイネ(此に)

ウヘ(其)、ギ(に)——<sup>○</sup>ギ<sup>○</sup>エヘ(其に)

約言。熟合の場合には音の省約が行はれることが多いやうであるが、一定の規則はなく、どういふ

風に約言せられたかといふことすら分らぬ場合がある。例へばカルスツスはアスといふ語をギシの約てあると説いて居るが、私は首肯しかねる。さりながら代名詞グアホ(我)がガイ(有)、ホ(我)の熟合語であり、グイ(彼)がガイ(有)、ヤ(彼)の約てあることは後記のやうに殆ど疑の餘地がない。眞淵一派の學者が唱へたやうな約音法則——即ちツバクラがタカになるといふが如き——はチャモロ語には行はれて居らぬやうである。

助語ナ(の)が約せられてンとなり、前續語に接着する場合のあることは延言の項下に述べた通りである。

#### 四、語の構成

原始人が偶然の機會に於て或は種々の着想により案出した語——原語——の數は勿論極めて少數であつたらうが、必要に臨み殖やして行つて其々の寰境に應じ、相互の意志疏通に十分な數に達したのである。新語は其事物、其思想と共に他から輸入したもの、即ち外來語も少くはないが——現在のチャモロ語にはスペイン傳來の語が極めて多い——大部分は原語から導いて來るのである。其方法は二種で、一は音韻を變化して之を示し、他は語の前後に他語を結合するのである。學者は前者を屈折(inflexion)、後者を凝着(agglutination)と稱へて區別して居るが、いづれの國語でも此兩者を兼用せぬものはなく、

唯いづれを主とするかによつて屈折語と凝着語とにわかれるのである。チャモロ語は正に後者に屬する。

凝着にも亦二つの方法がある。其は邦語のやうに主として語尾に他の語を添へて「言ひ、たり、し、なり、けり」の如く後へ後へと伸びて行くものと、之と反對に頭へ頭へと附加へられるものである。前者を接尾性といふ得べくは後者は接頭性である。此相違は落想の順序から起つたことで、我々の頭には「月を見る」といふやうに「月」といふ語が最初に浮ぶが、支那人は「觀月」というて「見る」といふ行爲を第一に腦中に描くのである。チャモロ語の意志表示<sup>セシテニス</sup>に於ける語の排列は吾人のものとは正反對で、例へば「彼は牛を賣る人達に逢うた」といふことを

ハンダ(彼、發見)、タウタウ(人)、シハ(達)、マンマンベイベンデ(賣賣)、トロ(牛)、シハ(等)といふ。従て語の構成に於ても基礎になるものが最後に位する。例

ガガウ(乞)——ウハ・ナ・ファン・マン・ガガウ——ウハナファンマンガガウ(乞はしむるならん)

即ち典型的の接頭性凝着語である。さりながら語尾に接着する場合もあり、又屈折が行はれることもあるのみならず、一成音又は一語を重疊して新語をつくる例も少くはない。以下次々に之を説明する。

接合。チャモロ語の研究には接頭語、接尾語が最重要であるから、左に現在用ひられる重なるものを列擧する。

## 接頭語

ア、アン 今では認識せられて居らぬやうであるが、アは本初冠詞の一種として物の名稱に冠せられたものらしい。アを以て始まる語のうちにはいくらかも其形跡を認められるが、最顯著な一例を挙げると、スペイン語 *Jané* (名聲) から轉じたと思はれる語にアマニアオ(有名)といふのがある。アの音便アンは今でも物の名稱を表示する接頭語として用ひられる。例、セピヨ(鉋)——アンセピヨ(鉋屑)。

南隣ブラウ語では今でもアを冠詞に用ひる。邦語に於ても上代にはアといふ冠詞があつたのであるまいかと思はれる。麻は野生のものをヌサ、園に生ひたるものをフサといひ、又「サ根サシ」サガムの小野」などともいふから、其本名はサで、アといふ冠詞をそへてアサというたのであらう。イ、イン ネ(此)は原形の儘では接頭語として用ひられることはないが、インの形に於ては色々

ひられる。例 オオ(呑)——インエオ(嚙下)。アチロン(黒)——インアチロン(黒裝束)。オツドト(蟻)——インエツドト(蟻多き)。

エ、エン 物の名稱に接着して其に關係のある行爲を表示する。例、グイハン(魚)——エグイハン(漁)。グマ(家)——エングマ(棲居)。

又缺乏を意味することがある。例 ヒナソ(考)——エヒナソ(考が乏しい)。

カ 原義不明。例 ハガ(血)——カハガ(血に塗れたる)

ガ 傾向を意味する。例 サラビ(金錢)——ガサラビ(拜金)。 タニス(泣)——ガツマニス(泣虫)

ギナ ガの變形である。例、ギナサラビ(貪慾)

グ 所在を意味する。例、フォナ(前進)——デフェナ(前方に位する)

グフ、グス、ゴフ 原意は「甚」であるが、次に掲げるチャト(些)と相對して善惡兩方面を表示するに用ひられる。例 タノ(土地)——ゲフタノ(膏腹の地)、チャトタノ(不毛の地)。

タイ、チ 「無」の意であるが、反對のことを表示するに用ひられる。例 ヒネコグ(終)——タイヒネ

コグ(無極)。 ママタイ(死滅)——チママタイ(不滅)。

タグ 「甚」「異常」の意であるが、常に接頭語として用ひられる。例、ヒロ(高)——タグヒロ(絶長)。

チャ、アチャ、チイナ 同等、同様の意を表示する。例、ウナグ(重)——チャウナグ(同等に重い)。チ

ナウナグ(同重)。 アバカ(白)——アチャアバカ(同様に白い)。

チャト 「些」の意。グフに對立すること上記の通りである。例、グフポゴ(美)——チャトポゴ(醜)。  
ナ 使動接頭語(動詞の項下参照)。

ハ 傾向を表示する。上記のガとの關係は明白でない。例、ロロロ(怒)——ハロロロ(怒り易き)。

ピナト 「過多」の意。例、マミス(甘)——ピナトマミス(甘過る)。

フア、フアン(マ、マン) フアの原義は「作爲」で邦語の「し」と同じく色々な場合に用ひられる(動詞の項下参照)。接頭語としての用例は次の通りである。

チチヤヌ(團子)——フアチチヤヌ(團子を作る)。

フ(我)、ライ(王)——フアラライ(我、王と見られる)。

ババ(愚)——フアババ(愚を演ず)。

ハ(彼)、ツノ(知)——ハフア ハツノ(知つたか振する)。

フアマ 右のフアと同様に用ひられる。恐らくはフアの疊語であらう。例

アトモトサ(朝食)——フアマアトモトサ(朝食を支度する)。

アフオグ(石灰)——マママアフオグ(石灰になる)。

マ、マン 多数を示す接頭語で主として複数を示すに用ひられるが、マミス(甘)、マカト(重)などのやうにマを以て始まる形容語の多い所を見ると、次のママの原語で形容接頭語とも稱すべきものが別に存して居たか、若くは上記のフアの轉義ではなからうか。此接頭語を冠したものには次のやうな例がある。ソグソグ(病)——マソグソグ(瘠せたる)。チテグ(裂)——マチテグ(裂けたる)。

ママ 「爲し得る」といふ意である。例、ギメン(飲)——ママギメン(飲み得る)。タイタイ(讀)——ママタイタイ(讀み得る)。

ミ「盈」の意である。例、サラビ(金錢)——ミサラビ(富みたる)。ウナイ(砂)——ミウナイ(砂多き)。

ラ、ラト「今少し」といふ意である。例、ビホ(齡——外來語)——ラビホ(今少し年とりたる)。カ

タン(東)——ラカタン(今少し東)。

ウマ 相互を意味する。例、ウマファナ(ファナ——立) イドス(二)——兩者對立。

カルスツス師はアに此意があると説明し、ソタ(發見)——アソタ(會逢)、ゴデ(縛)——アゴデ(相縛)等の例を擧げて居るが、接頭語中に之を加へなかつた所を見ると疑があつたのであらう。恐らくは此アは上記の廢用となつた冠詞で、熟語として或る語に残り、或は之を重疊屈折してウマとすることによつて相互の意を示すやうになつたのであらう。

接 尾 語

エ、イエ 「其」といふ代名詞の轉用で「其に」又は「其を」の意味に用ひられるもののやうである。例、

トラ(唾)——トラエ(其に唾する)。アバガ(肩)——アバガエ(其を肩にする)。サウサウ(淨化)

——サウサウエ。最後の場合には音便によつてサウサグエとも發音する。

オン、ヨン 「可能」の意を表示する。例、ファチナス(爲)——ファチナソン(爲し得べき)。アシイ、許

——アシイヨン(許し得べき)。

グアン、アイグアン「潜に」「不意に」といふ意を遇する。接尾語のみに用ひられるが、語原は不明である。例、チュレ(持來)——チュレグアン(潜に持來る)。ファリノ(紛失)——ファリナイグアン(5つの間にか失ふ)。

ニヤイホン 行爲を表現する。邦語の動詞接尾語ナヒ(まじなひ、商なひ等)と相似た趣がある。例、チャグチャグ(鋸)——チャグチャグニヤイホン(鋸斷)。アガン(叫)——アガンニヤイホン(公告)。ハ 邦語「ばかり」に相當する。例、ホゴ(汝)——ホゴハ(汝ばかり)。ファチヨチヨ(仕事をする)——マチヨチヨチヨハ(働いてばかり居る)。

ヤン 「場所」の意。此接尾語を用ひる場合にはファを接頭するが普通である。例、チュバ(煙草)——ファニユバヤン(煙草畑)。ベナド(鹿)——ファンベナツヤン(鹿の多い所)。

疊語。接合語に次いで數の多いのは疊語である。疊語は次の三種に區別することが出来る。

(一) 全語を反復するもの。例、タタ(父)。ナナ(母)。タグタグ(響、鳴)。ボンボン(塵)。

(二) 語頭の一成音のみを反復するもの(疊頭)。此疊語は次の如き場合に用ひられる。

(イ) 物の複數を示す場合。例、ラヘ(男)——ララヘ。ハガ(娘)——ハハガ。

(ロ) 動作の反復を示す場合。例、ファチナス(爲)——ファファチナス(作爲)。アガン(呼)——アアガン(呼號)。

(ハ) 動作の實演者(人、物)を示す場合。例、カノ(食)——カカノ(食ふ人)。

(ニ) 形情の加重を示す場合。例、ロロ(苛)——<sup>イライラ</sup>ロロロ(苛苛)。

但し接頭語を冠した語にあつては其の次の成音を反復する。例、ファニユリ(持來す)——ファニユニユリ。

外來語に在つては次のやうに疊むこともある。例、プランタ(植)——プラランタ。

(三) 語尾の成音を反復するもの(疊尾)。極めて稀ではあるが、尙次のやうな例がある。ダンクロ(大)——ダンダンクロ(大大)。

屈折。上記の疊頭語の意義に更に小修飾を加へる必要のある場合には、語頭成音に同行變化を施して——換言すれば其母韻を變化して——之を表示する。之は邦語に於て玉といふ語に接尾語<sup>ヒ</sup>を接着一て「たまひ」といふ動詞となし、更に「給ふ」と變化したのと軌を一にするもので、明に屈折 (inflection) である。チャモロ語に於ては屈折は次の如く行はれる。

(一) 複數の相互的關係を示す場合。此場合には第一成音はウ韻に變化する。之と同時に次の子音は類化 (assimilation) を起してマ行に同列變化する。例

チェロ(兄又は弟)——<sup>ウ</sup>チェチェロ(兄弟)——<sup>ウ</sup>チェメロ(相互兄弟)。

ン(同複數)——<sup>ウ</sup>グマ<sup>ウ</sup>チ<sup>ウ</sup>ン(相互仲間)。

ガチ<sup>ウ</sup>ン(仲間)——ガガチ<sup>ウ</sup>。

(註) 此形はチヌメロ ハムヨ——彼等は互に兄弟か——といふやうに用ひられる。複数中に相互關係を示すことはポリネシア語系の特徴で、後記の代名詞に於て其觀念が最判然とあらはれる。

(二) 動作の繼續を示す場合。此場合には反復を表現する疊頭語に(一)と同様の屈折を起す。例、  
イタイ(讀)——タタイタイ(讀み讀む)——ツマイタイ(讀めり)。

(三) 動作、形情に關する事項を示す場合。邦語の「、、すること」といふに相當するもので、第一成音をイ韻に變化して之を表示する。同時に次の子音は類化を起してナ行に同列變化する。例

ロカ(高)——ロロカ(高々)——リネカ(高さこと、高さ)。

ハソ(考)——ハハソ(考へ考ふ)——ヒネソ(考ること、思想)。

右の如く屈折の結果が常にイ韻とウ韻とであるのは注意すべきことである。邦語に於ても屈折は最初イ韻及ウ韻に起り、次でエ韻、ア韻に及んだ形跡がある(拙著「通俗文法講話」參照)。

(註) カリスツス師は上記のツマイタイ、リネカ等の變化を説くに當り、語頭子音の次にum又はinを挿入したものであるというた。ローマ字でかけば *fa-i-i* — *tumaitai*, *loca* — *lineca* となるから、此説明は簡にして要を得て居るやうであるが、一成音(音節)を二つに引わけ、其間に一語又は一語分子を挿入するといふやうな變化の様式は他に類例を見ぬことで、子音と母韻とが不可分の成音を形成するチヤモロ語に在つては想像も及ばぬことである。m・nを以て子音の類化なりとする私の説の誤まつて居らぬことはギンゴン(ブツブツいふ)といふ語はギンゴン(ブツブツいふこと)と變化するがギンゴンとはいはぬことによつても立證せられる。即ち屈折は第一成音に限られ、第二成音の變化は單に音便である。邦語に於てもハタを重ねてハタハタといふべき

をハナハタ(甚)と發音して居る。

## 五、單語概説

西洋では單語を冠詞、名詞、代名詞、數詞、形容詞、副詞、動詞、接續詞、前置詞、間投詞の十品辭に區別する。此等の名稱は語の性質を表明するには極めて便宜であるから、我國でも普く用ひられて居るが、品辭の別は決して用途のみについて設けられたのではなく、其形式の相違にも基くものである。其故に構成を異にする語に在つては、嚴密な意味で此品辭を適用することが出來ぬ。例へば漢語の「明」は形容詞であるが、「失明」といふ場合には名詞になり、「明之」といふ場合には動詞であり、「明見之」といへば副詞であつて、英語の *clear, clearness, to clear, clearly* のやうに形の上の區別はない。チャモロ語は其流通自在なる點に於ても、變用(デクリネーション)及活用(コンジュゲーション)の乏しいことに於ても、頗る漢語と趣を同うするものであるから、西洋文法乃至其真似をした間違だらけの日本文法に當て嵌めて説くことは徒に繁雜、誤解を招くのみである。よその語は之を自用語に照しあはせて研究してこそ始めて判然と姿がうつり、隈なく會得せられる。其故に Hoffman や Chamberlain が自國語の文法に准じて日本語を記述したのは尤千萬なことであるが、其方法を殆ど其儘襲用して日本人に教へる日本文法を作らうとしたのは抑無理ではなかつたらうか。無識なる文政當局者によつて此杓子定規の文法を推

しつけられたのは迷惑至極で、中等學校の生徒が日本文法といふ科目をいやがるのも無理ならぬことである。其結果完全に意志を發表することが困難になり、知識の交換が十分に行はれぬので少からず文化の向上を妨げた。——之を文字の罪に歸するのは一を知つて二を知らざるものといはねばならぬ。——私の此研究は外國人の爲にするものではないから、所謂文法の型をはなれ、我々の語に對する固有思想から見て、チャモロ語とはこんなものであるといふ概念を得ることを以て満足するのであるが、尙インドゲルマン語との異同を辯ずる爲に、二三の文法的比較を試みることにする。

**品辭。** チャモロの單語を強ひて分類すれば(一)物を表示する語と、(二)事を表示する語とになる。前者は物の名稱で、人名、親族關係、身體各部の名稱等も之に含まれる。後者は其以外の語で、西洋流にいへばあらゆる品辭を含むのであるが、上述のやうに一語で數用を兼ねることがあるから、截然たる區別を立てることは出來ぬ。本編では特別の變用又は活用を備へて居る代名詞、動詞、數詞のみを別に論じ、他は意志表示方法中に一括して説くことにする。

**性** タタ(父)、ナナ(母)、ラヘ(男)、バラウアン(女)といふやうに本質的には差別があるが、文法的に性を區分することはない。自然性を區別する必要がある場合には右のラヘ(男)、バラウアン(女)といふ語を附け加へる。例

バトゴン(子) ナ(の) ラヘ(男) 男の子

バトゴン(子) ナ(の) バラウアン(女) 〓 女の子

數。複數も亦必要のある場合にのみ區別する。其方法は次の三様である。

(一) シハ(其等)といふ代名詞を添付する。例、レプロ(書物)シハ 〓 其等の書物。

(二) 疊頭語(語構成の項参照)を以て示す。(此場合音便による子音變化が起ることがある)。例、ラヘ(男)ララヘ。ハガ(娘) 〓 ハハガ。バトゴン(子) 〓 フアマグオン。バラウアン(女) 〓 ファマラウアン。

前項屈折の條下に述べた相互的關係を示す複數も亦此一種である。例へば、フマガオン ヒタといへば、我と汝と二人の間の子供といふ意になるのである。

(註) 國語に於て人々、國々、處々というて複數を示すことがあつても、男々、女々といへぬと同様に、此方式はどの語にも適用せられないものでないから、各語について之を學ぶ外はない。

(三) 複數を意味する接頭語マ(又はマン)を冠して表示する。此場合次の子音の類化し得るものは類化を起す。例、チエロ(兄弟) 〓 マニエロ。サケ(盗人) 〓 マニヤケ。タイラエ(悪) 〓 マナイラエ。マウレグ(善) 〓 マンマウレグ。ツノ(知) 〓 マニツノ。ファニヤゴ(生) 〓 マファニヤゴ

右の如く複數は必しも名詞には限らず、善、惡のやうな形容語並に知、生の如く動詞となる語に於ても

表示せられることがある(代名詞については次項で述べる)。複數動詞は主語が複數の場合に用ひられる。複數形容詞が先行する場合には名詞は單數の形であつても複數を意味する。例イ(冠詞) マンマウレグ(善、複數) ナ(の) タウタウ(人、單數) 〓よき人達。

(註) スペイン傳來の語に在つてはスペイン語と同様に語尾にsを接着して複數を表示する。例 *dos libros* 〓二冊。

格。 チャモロ語には格を表現する何等の形式も存在せぬ。或る語が主格に立つか、或は客語であるかは文脈を以て判断するの外はない。例

アガン(呼) シ(冠詞) ペドロ 〓ペドロを呼べ。

ハアガン(彼、呼) シ ペドロ 〓ペドロが呼ぶ。

他の語に對する關係を表示する爲に我國の助語(テニヲハ)に類する語が用ひられるが、其數は極めて少いので今ではスペイン語の前置詞が流用せられて居る。左に固有のもののみを掲げる(意志表示の項下参照)

ナ 二つの語が支配、被支配の關係に立つ場合には此助語を用ひて表示する。例、イ(冠詞) タイラ

エ(惡) ナ(の) バトゴン(子) 〓惡童。

被修飾語が前行する場合も同様であるが、母韻を以て終るときは<sup>ン</sup>を語尾に接着して之に代へる。

例、イ(冠詞) レブロン(書物、の) ホーゼ 〓ホーゼの書物。

ヌ(ヌ イ又はニ) 名詞が主格、支配格以外に立つことを表示するもので、邦語のを、に、よりて等に相當するが、必要の場合の外は用ひぬ。ニはヌイ(冠詞)の連約である。例

イレグニヤ(言、彼) ヌ(に) シハ(彼等) 彼等に彼のいへる。

ナエ(與) シ(冠詞) ヌ(を) イ(冠詞) レブロ(書物) ペドロに書物を與へよ。

ギ 漢語の「於」に相當する。例、ギ マギン (此方に)。ギ エガアン (朝に)。

冠詞 イ、イヤに先行する場合には連約によつてギ(ギ イ)、ギヤ(ギ イヤ)となる。カルスツ  
ス師はアスも亦ギ シの連約であるというて居る。餘りにかけ離れて居るやうに思はれるが、アス  
がギと同様の場合に用ひられることは事實である。

ギネ 我「から」「より」に相當する。例、ギネ マノ (何處から)。ギネ タヤ(無) 無一物から。

サン 方位を示すに用ひられる。例、サン カタン(北方)。サン メナ(前方)。

時及法。 チャモロ人には「時」の觀念が乏しかつたと見えて其動詞の活用には現刹那を境として其以後と以前との二格を見出し得るのみである。私は便宜の爲、之に自今格(今から)至今格(今まで)といふ名を與へた。詳細は動詞の項下に述べることにする。

右の二時格中に於て或る期間に亘り動作の繼續することを示す語法がある(繼續格と名づける)。其他遙な未來、遠い過去を表現するには夫々相當の副詞を用ひるのである。

西洋語の口氣ウカイ即ち受動、使動にあたるものはチャモロ語に於ても之を見出し得るが、「法」と名づくべき變化もなく、不定形、分詞形のやうな特別用法もない。之を要するに漢語の動詞と同様に文脈及措辭によつて了解するの外はないのである。

時と法との活用がないから助動詞と名づくべきものも皆無である。

比較。形容詞及副詞の比較といふことも邦語と同様に、意味に於ては存在するといひ得るが、形の上からは特別の方式はないのである。

## 六、代名詞

### 第一、人代名詞

構成。チャモロ語の人代名詞の原形は次の如きものであつたらしい。

オ。 第一人稱(我)及第二人稱(汝)に共通である。恰も國語のオレ又はオノレが自分をも相手をも表示するやうな類タグヒである。

ア。 第三人稱(彼)。國語に於てもアレは第三人稱である。

タ。「我と汝と」といふ意である。此表現はドラヴィダ語、ポリネシア語に於て之を見るが、インドゲルマン語には例がないので、西洋人は之を第一人稱複數の中にいれて「我々」と區別する爲に、イン

タリユシトヅ(含他)と名づけ、之に對して純粹の一人稱複數をエクスクリユシトヅ(排他)と稱へて居るが、私は便宜の爲、自他稱と呼ぶことにした。邦語のタ(誰)オノ(己)も本初は此意味ではなかつたらうか。

右の如く三語ともに邦語と同様であるのは必しも偶合とはいはれまい。チャモロではオ、アはホ、ハとも發音せられ、——國語ア(我)がワともいはれるやうに——更に音便によつてヨ又はモ竝にヤとも轉化した。此五語(即ちホ、ヨ、モ及ハ、ヤ)と上記のタとは人代名詞構成の根幹たるものである。

邦語ワレ、ナレ、カレ、タレ等のレはアリ(有)から轉じたものである。之と同様にチャモロ語でもガイ(在)といふ語が右の基本形と結合し、連約、音便によつて變化せられて次の如き語を生じた。

ガイ、ホ——グアホ(我)

ホ、ガイ——ホゴ又はハウ(汝)

ガイ、ヤ——グイヤ又はグイ(彼)

ガイ、タ——ヒタ又はヒト(自他)

又複數を示す爲に左の諸語がつくられた。

ホ、モ——ハメ又はハム(我々)

ホム、ヨ——ハムヨ又はミヨ(汝等)

シ(此)、ハ——シハ(此彼——彼等)

右の外に語頭又は語尾に接着して用ひられる特別の形式が生まれたので、現在では人代名詞を次の四種に區別するが、大體に於て上記諸形の轉用に外ならぬのである。

	獨立語		接尾語	接頭語
	長形	短形		
一人稱單數	グアホ	ヨ	ホ	フ
二人稱單數	ホゴ	ハウ	モ	オン
三人稱單數	グイヤ	グイ	ニヤ	ハ
自他稱	ヒタ	ヒト	タ	タ
一人稱複數	ハメ	ハム	マメ	イン
二人稱複數	ハムヨ		ミヨ	エン
三人稱複數	シハ		ニイハ	ハ

備考。

(一) 接頭語形にオン、イン、エンを用ひる理由は次の如く説明せられる。

オ は上記のやうに我、汝といふ語の原形である。

イ とエとは次に説くが如く、指定、代名詞の近稱及中稱の原形であるから、之を第一人稱と第二人稱とに轉用したのは極めて有り得べきことである。邦語でもコチ（此方）、ソチ（其方等）を人代名詞に用ひて居る。

三語のンは音便の爲に挿入せられたのである。

オンは往々ウンとなることがあり、又インとエンとは相通ずる。

(二) 後記の如く接尾形一人稱單數のホは今ではコと轉訛することがある。

**獨立語形。**獨立語の形をなすものは格による變化はないが、長形と短形とは聊か用法を異にする。長形は次の場合に用ひられる。

(イ) 動詞に先行する場合。例、グアホ(我)、ファチナス(爲)、イネ(此)——我之を爲す。

(ロ) 動詞なしに用ひられる場合、即ち助語(前置詞)に連なるとき若くは簡單なる語句中のもの。

例、ギヤ(ギ イヤの略、ギはに、イヤは冠詞)、ヒタ(我と汝)——我々の許に

短形は常に動詞の後に位する。例、チュリ(持來)、ヨ(我)、ウン(一)、マンハ(椰子)——我に一個の椰子を持ち來れ。

**接尾語形。**此形は語尾に接着して所有代名詞の用をなす。例、タタ(父)——ホ(我)——我父。ナ

ナ(母)——ニヤ(彼)——彼の母。但し二成音から成る此種代名詞、即ちマメ(我々)、ミヨ(汝等)、ニイハ

(彼等)を接着する場合にはナ(の)の變形ンを挿入する。例、メナ(前)ン、ミヨ——汝等の前。タテ(後)ン、マメ——我々の後。

(註) 右によれば真正の接尾語形はホ(我)、モ(汝)、ニヤ(彼)、タ(自他)の四語で、二成音より成る上記三語は獨立諸形の語頭が音便によつて變化を受けたものに過ぎぬ。

現在ではホの代りに屢コを用ひることは既述の通りである。例、イ(冠詞)、グエロ(祖父)——我祖父。

獸畜の所有者を表示する場合には特にガホ、ガモ、ガニヤ、ガタ、ガマメ、ガミヨ、ガニヤハといふ語を用ひる。此ガはガガ(獸畜)の原形であるらしいが、今では單獨には使用せられぬ。此代名詞の用法は左記の例に示す通りである。

ガホ(我家畜)、ナ(の)、バブイ(豚)——我豚。

ガモ(汝の家畜)、ナ(の)、ナナ(鶩)——汝の鶩。

ガニヤ(彼の家畜)、ナ(の)、ガガ(獸畜)——彼の家畜。

エスタ(此)、ナ(の)、マヌグ(鶏)、ガマメ(我々の家畜)、ヤン(又)、チ(無)、ガミヨ(汝等の家畜)

——此鶏は我々ののであつて汝等のものではない。

接尾形代名詞は又イヨ(所屬)といふ語にも接着して、動詞の代りに用ひられる。例、イヨコ(我所屬)、

エスタ(此)、ナ(の)、グマ(家)——此家は私に屬する。

接頭語形。 動詞の活用を表現する爲にのみ用ひられるものであるから、次の動詞の項下に記述する。

第二、指示代名詞

チャモロ語固有の指示代名詞の原形は次の四語である。

近稱 イ(此)。 中稱 エ(其)。 遠稱 ウ(彼)。 不定稱 ア(或)

此四語から次のやうな變化を生じた。

原形

第一變形

第二變形

イ イネ(イイネ)

アイイン

エ エナウ(イエナウ)

ウ ウヘ(エヘ)

アヨ

ア(ハ) グアハ(ガイ、ハの約——或有)

原形は今ではイの外用ひられぬ。イは冠詞として使用せられる外に次のやうな用例がある。即ち、イ、

マト(到着)、ニバブ(昨日)——昨日到着せる者。

第一變形は格の如何に拘はらず一般的に指示代名詞に用ひられる。例

グイヤ(彼)、フテチナス(爲)、イネ(此)——彼之をなす。

ダララグ(從)、エナウ(其)、ナ(の)、タウタウ(人)——其人に從へ。  
グアハ(或有)、ナ(の)、タウタウ(人)——或人。

前續語との關係上母韻を以て始まることを不可とする場合にはイネ、エナウ、ウへの代りにイイネ、イエナウ、エへを用ひる。

第二變形には第一變形に接頭語ア——昔の冠詞であるらしい——を冠したもので、賓辭(プレデケト)に先行する場合にのみ用ひられる。例、アイイン(此)、ナ(の)、タウタウ(人)、オンダララグ(從、——  
第二人稱自今格)——此人に汝は從ふだらう。

右の外次の諸語も亦此代名詞に屬するものである。

(イ) 「此」といふ意味を示すには現今はいづれの場合にも専らスペイン語エステ(este)を用ひる。例  
エステ ナ レプロ——此の書物。

(ロ) 「誰」「何」「如何」「孰」を示すにはハイエ(又はハイ)及ハファ(又はハフ)を用ひる。例

ハイエ ナ タウタウ——誰人か。

ハファ ナ グマ——どの家か。

此兩語はア(ハ)から導いたものであることは言ふまでもなく、ファは數詞イファ(幾)から導いたもので、イエの意味は不明であるが、恐らくは既記の接合語分子エと同原から出たものであらう。兩

語の用法上の區別も明瞭ではないけれども。前者は主として人物に對し、後者は事物に對して用ひられるものであるらしい。

(ハ) 「何處」はマノを以て表示する。例、ギネ(から) マノ(何處)、ハウ(汝) 汝は何處から(來た)か。

タイマノは「如何やう」といふ意に用ひられる。

ハイエ(ハイ)、ハファ(ハフ)及マノの三語は疑問代名詞と稱へても差支はないが、尙不定稱の變用と見るが至當であらう。

**關係代名詞に就て。** 關係代名詞の存否はチャモロ語の系統を論ずるに當り至大の關係があるものである。

其に英らしい——少くともカルスツス師がさうであるというた——一二例を擧げる。

(一) ハアツダ(彼逢) ウン(一) ラヘ(男) ナ シ(冠詞) ホーゼ ナアンニヤ(其名)。

(二) コネ(誘引) イ(冠詞) ファマンゲオン(兒輩) ニ マニヤガ(待てる) サンーヒユン(外に)

第一例を「ホーゼと呼ぶ所の人に逢へり」、第二例を「外に待つ所の子供を誘き入れよ」と譯すればナとニとは關係代名詞として説かねばならぬが、前者は「其名ホーゼの人に逢へり」と讀むべきもので、後例のニはナ、イの約と見て、指定代名詞のイの用法に照し「外に待てる者の其子供を呼び入れよ」と譯し得ら

れる。右の如きの用法は我古語にはめづらしからぬことで、「風まじり雨ふる夜の雨まじり雪降る夜は」(萬葉集五卷)、「天地にくやしき事の世の中にくやしき事は」(同上第十三卷)の如く、要するに同位格に立つ二つの句を連結する用をなすものである。二句を聯結する語と關係代名詞との間には雲泥の差がある。前者は決してカルスツス師のいふが如き代名詞ではない。

又カルスツス師の示した例によるも獨逸語の *Er traf Leute, welche Stiere verkaufen* は、*ハア* *ンダ* (彼逢) *タウ* *タウ* (人) *シハ* (其等) *マン* *マン* *ベー* *ベン* *デ* (賣) *トロ* (牛) *シハ* (其等)とあつて、一つも關係代名詞らしい語は用ひられて居らぬ。

是故にチャモロ語には關係代名詞は存在せぬと断定すべきである。

## 七、動詞

**動詞の限界。** チャモロ語には動作を表現する語はあるが、嚴重な意味の動詞といふ品辭は存在せぬ。語自體が動作を意味して居ても、必しも動詞として用ひられず、之に反して物の名稱でも、少しく形を變へれば動詞としてつかふことが出来る。此點は頗る漢語に類するものがある。例へば魚、禽はまぎれもない名詞であるが、之に偏傍を加へて漁、擒とすれば動作を意味する語となるのである。チャモロ語に在つては偏傍の代りに接頭語又は接尾語を用ひ、*グイ* *ハン* (魚)、*ファ* *ニエ* (蝙蝠)にエを冠してエグイ

ハシ(漁)、エフアニエ(蝙蝠狩)とし、コスタト(袋)、アバガ(肩)にエを添へてコスタテ(袋に入れる)、アバガエ(肩にかつぐ)とするのである。此種の接頭、接尾語は既に語構成の項下に列挙して置いから、茲には省略する。

右の如く動詞の限界は甚曖昧であるが、動詞的用法は嚴然として存在するから、私は特に「動詞」といふ一項を設けたのである。さりながら之をインドゲルマン語乃至邦語の動詞と同一視するに於ては大なる誤解を生ずるから、常に漢語の動作を表現する語に對する氣持を以て臨むことを必要とする。是故に私は能ふ限り漢字のみを以て對譯を附することにしたのである。

此やうな言語に於ては動作の自他が判然せぬことは勿論である。ハナウ(行)、フアラゴ(走)——自動詞——チュリ(持來)、フロク(割)——他動詞——の如く意義上自ら區別し得られるものもあるが、多くは自他兩用である。例へばリイ(見)は、フリイ(我見) オ(冠詞) フロレス(花)——「花を見る」といふやうに用ひられるときは他動詞であるが、フリイ バゴ(今日)——「今日見る」といへば自動詞である。但し他動詞たることを明示する必要がある場合には接頭語ファ(爲)を冠する。例

チュリ(持來)——ファニユリ(爲、持來)——持來す

ガガウ(乞)——ファンガガウ(爲、乞)——乞ひなす

又形容語を他動詞にする爲には接頭語ナ(令)を冠すること次の例に示す通りである。 ナ(令) アバカ

(白) 白くする。 ナ(使) ガスガス(淨) 淨くする。

活用。 漢語「讀」は一字を以て句をなした場合には「よめ」といふ意味になり、「我讀之」といふやうに其動作を爲す主格が示された場合には實演を表示するけれども、「讀む」にも「讀みさ」にも通用する。チャモロ語でも之と同様に、單にタイタイ(讀)といふか若くは此語が句頭に置かれた場合には「讀め」といふ命令法(意志表示の項参照)で、フタイタイ(我讀)は既述の至今格である。

右の如く至今格の活用は接頭形人代名詞によつて表現せられるから、人稱によつて變化することは當然で、左記の七形式を生じ、三人稱の單、複數が同一であることを除いては、互に相違があるのである。例

至今格

原形	タイタイ(讀)	ハナウ(行)
第一人稱單數	フタイタイ	フハナウ
第二人稱單數	オンタイタイ	オンハナウ
第三人稱單數	ハタイタイ	ハハナウ
自他稱	タタイタイ	タハナウ
第一人稱複數	インタイタイ	インハナウ

第二人稱複數

エンタイタイ

エンハナウ

第三人稱複數

ハタイタイ

ハハナウ

(註) インとエンとは口語では往々相通して用ひられる。

此代名詞は動作の實演を標識する爲に接頭せられたものであるから、別に主格が表現せられた場合にも之を省略することはない。例

イ(冠詞) タタニヤ(彼の父) ハタイタイ 彼の父が讀む。

グアホ(我) フハナウ 我行く。

ファを以て始まる語に在つては前記のやうに接頭代名詞を冠することなく、ファをマに變化して其儘至今格を表示するに用ひる。例

原 形

他 動 詞

活 用

ガウガウ(乞)

ファンガガウ(爲乞)

マンガガウ

タチヨン(直立)

ファタチヨン(爲直立)

マタチヨン

ファラグ(赴)

マラグ

マラゴ(欲)

マラゴ

右の諸例中前二者は明に作爲の意味を以て接頭語ファを冠したもので、語頭をマに變化することにより

で實演を表示したものであり、後の二者のファは接頭語ではないかも知れぬが、前者と同様にマに變化するから、語頭に代名語を接着することを必要とせぬのであらう。フォを以て始まる語も之に準ずる。例、フォナ(前進)——モナ ヨ(我前進す)。

上記の諸語は接頭代名詞を冠せぬが故に人稱による相違は起らぬけれども、主格が複數なる場合には、之に應ずる爲、更にマ(マン)を冠して複數とする。例

單數	第一乃至	マン	ガ	ガウ
	第三人稱	マ	タ	チヨ
		マ	ラ	グ
		マ	ラ	ゴ
		マ	ン	マン
		マ	ン	マン
		マ	ン	マン
		マ	ン	マン
		マ	ン	マン
		マ	ン	マン

代名詞が此等の語の主格となる場合には短形を用ひて之を動詞の次に置く。例、マラグ・ヨ——我行く。マンマタチヨ ン ヒト——我汝共に立つ。但し接尾代名詞を動詞の語尾に接着することもある。例、ハフ(何) マラゴモ(欲、汝)——何を汝は欲するか。

右の至今格は既記の如く現刹那を境として其以前の時をさすのであるが、特に過ぎ去つたことを言はうとする場合には之を意味する語を副詞的に用ひて表現する。例

フォンハヤン(又はモンハヤン——了) フハナウ——我行きき。

フアグボ(又はマダボ——終) オンハナウ——汝行きき。

エスタ(イエスタ——既) ハハナウ——彼行きき。

ギネ(以前) インハナウ——我等行きき。

現時はスペイン語助動詞エスタル (estar) (有)の過去形エスタバを用ひて過去格を表現することもある。

例

エスタバ(有りき) ハウ(汝) ギヤ(ギと冠詞イヤとの連約——に) グイヤ(彼)——汝は彼の許に

居たか。

マンエスタバ(有りき——複數) ヒト(我、汝) ギヤ(に) シハ(彼等)——我等は彼等の許に居

た。

至今格に對して現刹那から以後を表現する時格を私は既述の如く自今格と名づけた。自今格を表現するには至今格に更にウを接頭する。——此語の原意は不明であるが、邦語のムに相當するものである。

——但し音便によつて省約が行はれることがある。例

自今格

原 形

タイタイ(讀)

ハナウ(行)

第一人稱單數

ウフタイタイ——フタイタイ

ウフハナウ——フハナウ

第二人稱單數

ウオンタイタイ || ウンタイタイ

ウオンハナウ || ウンハナウ

第三人稱單數

ウハタイタイ || ウタイタイ

ウハハナウ || ウハナウ

自他稱

ウタタイタイ || ウタタイタイ

ウタハナウ || ウタハナウ

第一人稱複數

ウインタイタイ || インタイタイ

ウインハナウ || インハナウ

第二人稱複數

ウエンタイタイ || エンタイタイ

ウエンハナウ || エンハナウ

第三人稱複數

ウハタイタイ || ウハタイタイ

ウハハナウ || ウハハナウ

即ち單數一人稱及複數の一、二人稱に在つては至今格と合致するが、其他に於ては明瞭に區別せられるのである。ファ(又はフォ)を以て始まる語も同様に活用せられることは勿論である。例、ファンガガウ(乞爲)——ウファンガガウ——彼乞ひなさん。

第一人稱單數に在つてはバイを接頭して未來を表現することがある。例、カフロ(登)——バイカフロ——我登らん。此バイはバヤ(傾向)といふ語の變形であるから、意嚮を表示する場合にのみ用ひられ、西洋文法のゾオリチエツに相當する。一人稱以外の活用を缺くのも此理由に基くものである。例

バイカフロ ギ(に) アトフ(屋根)——私は屋根に登らう。

繼續法。

疊語が動作の反復を示す場合のあることは既に語構成の條下に述べて置いた。例へばオマ

グ(浴)を疊頭してオオマグとすれば「繰返して浴する」意となり、オオマグ カダ セメナ(毎週水浴せ

よ)の如く用ひられるのである。邦語にも同様の語法があつて「海人ならましを玉藻かるかる」(萬葉集第十二卷)「始終言ひ言ひして居る」といふことがあるが、尙現在格の範圍を逸せぬものといひ得る。

さりながら反復はやがて行爲の連續を意味するものであるから、チャモロ語に於て右の反復語法に小變化を施して動作の連續を表現せんと試みたのは至當なことであつた。即ち疊頭語の第一成音を屈折してウ韻となし、音便によつて次の成音をマ行にかへた(同列變化)。一例を擧ぐれば、ファチナス(爲)は疊頭によりファファチナス(爲、爲)となり、更に屈折せられてフマチナスとなるのである。此形は現刹那以前に於て行爲の連續することを示すものなるが故に、私は之に繼續格といふ名を與へた。邦語に於ては動詞に「あり」といふ語を連結して(通例連約が行はれる)之を表示する。例へば「爲す」は「あり」と連つて「爲せり」となるのである。——口語では「して居る」「して居た」といふ——「爲せり」といふ語は現在にも過去にも用ひられるけれども、時格の極めて細密な我文語では「爲したり」(完了繼續)、「爲しけり」(過去繼續)の如く區別することも出来る。之に反してチャモロ語では現在、過去を通してフマチナス一形あるのみである。左に數例を加へる。

ラグセ(縫)——ララグセ(縫々)——ルマグセ——縫へり

ハナウ(行)——ハハナウ(行々)——フマナウ——行けり

サガ(留)——ササガ(留々)——スマガ——留れり

アガン(呼)——アアガン(呼々)——ウマガン——呼べり  
リイ(見)——リリイ(見々)——ルミイ——見あり

此形の動詞は接頭代名詞を冠することなくして其儘至今格に用ひられる。例

エステ(此) シハ(等) フマチナス(爲せり) エステ(此)——此等(の人)之を爲せり。

シ(冠詞) ナナ(母) ルマグセ(縫へり) エステ(此) ナ(の) マガゴ(衣)——母此衣を縫へり。

又此形とスペイン語の助動詞エスタル(有)とを連ねて完了(繼續)格を表示することがある。例

バラ(向) マノ(何處) エスタ フマナウ——何處に行きたるか。

(註) 邦語では「縫へらん」「行けらん」の如く未來にも此格を用ひることがあるが、チャモロ語では殆どつかはれぬ。従て自今格には此語法を缺くというても妨はないのであるが、若し強ひて之を用ひようと思へば自今格接頭語(代名詞)を冠して之を表現することが出来る。此場合には人稱に應じて變化することは勿論である。例

ラグセ(縫)——第三人稱單數 ウルマグセ(彼縫へらん)。

ハナウ(行)——第三人稱複數 ウハフマナウ(彼等行けらん)。

**使動法。** 邦語の「行かせる」「爲さしめる」の如き語法を使動法(コーサチーヴ)といふ。チャモロ語で

はナといふ接頭語を冠して之を表示する。例

ファチナス(爲)——ナファチナス——爲さしめる。

ハナウ(行)——ナハナウ——行かせる。

此形の動詞も亦接頭代名詞を冠することなくして活用せられる。例

グアホ(我) ナハナウ(令行) シ(冠詞) ホーゼ ギ(に) タシ(海)——我ホーゼをして海に行か  
しむ。

グイヤ(彼) ナラグセ(令縫) イ(冠詞) ナナニヤ(母、彼) エステ(此) ナ(の) マガコ(衣)  
——彼は彼の母をして此衣を縫はしめたり。

此二例のやうに主格以外に「行」、「縫」といふ動作を演ずるもの——即ちホーゼ又は「彼の母」——があらる場合の外、ラムラム(輝)——ナラムラム(令輝)、アソ(傾)——ナアソ(令傾)等も亦使動詞であるといひ得るが、邦語の觀念からいへば寧ろ他動詞と見るべきものである。形容語にナを冠した動詞、例へばアガガ(赤)——ナアガガ(赤化)、ガスガス(浄)——ナガスガス(浄化)の如きも同様であるが、何故にフア(作爲)を接頭せずして特にナといふ接頭語を用ひたのか、私には解しかねる。或はナも亦ファの轉化ではなからうか。いづれにしても後の場合、即ち主格以外に動作の實演者の存在せぬ場合には普通の他動詞の如く、接頭形代名詞を冠して活用するのである。例

ハナガスガス(彼、浄化) イ グマ(家)——彼(又は彼等)は家を掃除する。

此場合目的格が複数ならばナの次にファン(複数接頭語マの音便)を挿入する。例

ハナファンガスガス(彼、浄化) イ グマ(家) シハ(等)——彼(又は彼等)は家々を掃除す。

受動法。　チャモロ語に嚴密な意味の受動法が存在するかは疑問であるが、受動的の表現が用ひられる場合のあることは事實である。例へば「神は何人を愛するか」といふ意味を表示するに次の如き三様式がある。

ハイエ(誰)　ハゴフリエ(彼、愛)　シ　ユウス(神)

ハイエ　ギニフリエ　アス　ユウス

ハイエ　マゴフリエ　アス　ユウス

アスは如何なる場合にも主格を表現するものでないから、第二、第三例のハイエは「誰が」と譯すべく、従て受動形式であるとはいひ得られるが、カリスツス師のいふが如く、ギニフリエ、マゴフリエを以て動詞ゴフリエ(愛)の受動的活用なりとするは早計である。

抑もゴフリエといふ語はゴフ又はゲフ(甚)とリイ(見)とを結合して、「愛」といふ意味を含ませたもので、既記の語構成法に従つて次の二語を導いて來ることが出来る。

ゲフリエ——ゲゲフリエ——ギニフリエ——愛すること(名詞)

ゴフリエ——マゴフリエ——可愛(形容詞)

カリスツス師自身も字彙中には次の如く譯して居る。

ma-goffie = tener, lieb; Freund.

giniffie = Liebe; Liebenswürdigkeit.

之に従うて上掲の第二、第三例を逐字譯すれば次のやうになる。

ハイエ(誰が) ギニフリエ(親愛) アス(に) ユウス(神)?

ハイエ(誰が) マゴフリエ(可愛) アス(に) ユウス(神)?

即ち兩者いづれも動詞を省略した意志表示<sup>センテンス</sup>で——チャモロ語には決してめづらしからぬことである——受動法の要素は動詞の活用にあらずして寧、作因(アジエンス)を表示するアス<sup>〇</sup>といふ語にあるのである。従てアスの代りに同じ意味のヌ若くはニを用ひても同じ結果になるのである(單語概説の項下參照)。例

ギネド(束縛) ヨ(我) ヌ(に) イ ラヘ(男) || 私は此男に束縛せられた。

マゴデ(束縛せる) ヨ(我) ヌ(に) イ ララヘ(人々) || 私は人々に束縛せられた。

マゴデに相當する形容詞は邦語に存在せぬから、動詞の連體形を以て譯して置いたが、チャモロ語に在つては此形は決して動詞の活用ではなく、まぎれもない形容詞である。

簡単な語句に在つてはアス又はヌを省いても差支はない。例

マン インアカ(刺傷、複數) ハム(我々) ニヤモ(蚊) || 我々は蚊に刺された。

此語法は主格が第一人稱若くは第二人稱の場合には決して使はれることはない。例へば フナエ ハウ(我汝に與へる)といふが、ニナエ ハウヨ(汝が私に與へられる)といふことはないのである。

上記の外に動詞の活用は存在せぬ。接合及屈折によつて動詞から名詞形又は形容詞形を作り得ることは既述の通りであるが、其外に次の例に示すやうに代名詞を接着した特異な名詞形がある。

リイ(見)——イ リニエンニイハ——彼等の見るもの。

ハトサ(建築)——イ マハトサニヤ イ テムプロ(寺)——寺を建築すること。

フエン(外)——イ フムヨンニヤ——彼の外出せること。

又或る動詞は接頭形代名詞を冠することの代りに、接尾形代名詞を接着する。例へばアログ(言)は音便によりイレグと變化し、イレグコ、イレグモ、イレグニヤ、イレグタ、イレグマメ、イレグミヨ、イレグニイハの如く用ひられる。此等は或は我言、汝の言、彼の言等と解すべきであるかも知れぬが、尙ウイレグコ、ウイレグモ、ウイレグニヤの如く自今格にも用ひられるから、一種の不規則動詞と見るべきである。此種に屬するものはヤホ(好)、ヒナソコ(考)、ヒネロコ(信)、ガニヤコ(選)等である。ヒナソコはハソ(考)の名詞形から再轉したもので、ガニヤコの原形はガニエといひ、マメ(我々)、ミヨ(汝等)と接着する場合にはガオンとなる。

爾餘の語法は其々相當の語の助を得、若くは特別な言ひ廻しによつて表現せられるものであるから、作文法即ち次の意志表示法中に述べべきものであるが、邦語乃至西洋語の動詞との相違を明にせんが爲に茲に之を略説する。

(イ) 命令法。 上述の如く命令法は一語を以て句を切るか、若くは原形の儘句頭に置くことによつて表現せられるが、邦語の「行くべし」、「行かねばならぬ」といふ命令形式に相當するものは自今格を以て示される。例、ウハナウ シ ホーゼ——ホーゼは行かねばならぬ。ウハナウ イ ララへ——男共は行くべし。

現時は此場合にスペイン語から轉化したデベ・デ (debe de)、ネセシタ (necesita) を自今格に連ねて用ひることもある。例、デベ デ フハナウ——私は行かねばならぬ。

(ロ) 意向法。 話者の意嚮を示すには上記のバイを接頭した自今格を用ひる。例、バイフタイタイ イ レプロ——私は書物を読まう。

對話者を誘うて「さへ行かう」といふやうな場合には單に至今格を用ひる。例、タ ハナウ——我、汝と行かん。

(ハ) 希望法。 希望を表示するにはタナ(欲)を繼續格に連ねて用ひる。例、フナナ(我欲) ルミイ  
〔「見」の繼續格〕 ホンコン——香港を見たい。

(ニ) 可能法。 シニヤ(能)といふ動詞を自今格に連ねて用ひる。例、シニヤ オンダアサ(グアサ  
——研) イ セセ(小刀)——小刀を研ぐことが出来るか。

(ホ) 疑問法。 上例のやうに動詞を句頭に置くか、若くはバイエ(ハイ)、ハフエ(ハフ)、マノのやう

な疑を含む語を句中に挿んで之を表現する。短い句に在つては口調によつて區別するのみで、邦語のかに相當する助語はない。

(へ) 否定法。 ガイ(有)、グアハ(其有)に對する否定語はタヤ(無)で、タヤ レプロコ(我書物なし)、タヤ ナ レプロ(書物の無き)の如く使用する。

此語はイヨ(所屬)と連つてタイイヨ ハウ セセ(小刀)——汝は小刀を所有せぬ——の如く使用せられ、或はガ(獸畜)に結合せられて、タイガ ヨ チバ(山羊)——私は山羊をもたぬ(代名詞の項下参照)——といふことがある。

タナ(欲)の反對はムナ(不欲)で、直接に目的格を支配し、或は他の動詞の繼續格に連る。例

ムナ(不欲) ヨ(我) セトベサ(麥酒)——私は麥酒は欲しくない。

ムナ(不欲) ヨ(我) ウムイサグエ(イサウ)——冒瀆) シ ヌウス(神)——私は神を侮らぬ。

接頭語チャト(些)の變形チャに接尾形代名詞を接着したものは「勿」の意味に用ひられる。之に連る動詞は疊頭によつて反復を表示することを例とする。例

チャモ(勿、汝) ファラロゴ(走爲)——走る勿れ。

チャミヨ(勿、汝等) ファンハハナウ(行行爲)——行く勿れ。

右の如く對手(二人稱單複)の動作を阻止する場合の外、話者の否定的意嚮及第三者に對する禁止を

表明する場合にはチャホ、チャニヤ、チャタ、チャマメ、チャニイハの形を用ふべきことは勿論である。

(ト) 連體法。「瘠せたる女」「牛賣る人」のやうに動詞を形容詞的に用ひることを邦語では連體法と稱へて居る。チャモロ語ではマを接頭した形容詞形を以て之を表現する。例

イ バラウアン(女) マソグソグ(ソグソグ——病) 瘠せた女。

イ タウタウ(人) マベベンデ(ベンデ——賣) トロ(牛) シハ(等) 牛を賣る人。

チエムボン(チエムポ——時) マナム(ナム——時) 種蒔く季節。

第一、第二例のやうに支配語と被支配語とがヌを以て繋がれて居らぬ所を見るとマを接頭した形が連體法を示す一活用であるかとも見られるが、尙第三例のやうにナの略形ソを添付したのもあり、且マミス(甘)、マカト(重)の如く、マを以て始まる形容語中には動詞から派生したと思はれぬものが多いから、姑く疑を存する。

西洋語に於て不定法(インフィニチヴ)と稱するものはチャモロ語には存在せぬ。其故に英語で I wish to see Hongkong といふ場合には上記の希望法に従ひ、フタナ(我欲) ルミイ(リイ「見」の繼續形) ホンコンの如く譯せねばならぬ。又 there is something to sell はグアハ(其有) ハファ(或物) マベンデ(ベンデ「賣」の形容詞形) である。然るに近世のチャモロ人はスペイン語のバラ(英語の如に相當する語)を挿入してグアハ ハファ バラ マベンデ といふものがある。邦語に於ても上記二例の英語

に吻合する表現はなく、「香港を見むと欲する」「賣りたいものがある」といふべきを、當代の文士中には往々「香港を見るべく欲する」「賣るべき或るものがある」の如く西洋人の口吻を學んで得意がるもの、あるのは悲しむべきことである。「見べき」「賣るべき」といふ日本語は決して *to see, to sell* の意味ではない。

右の外英語で *he orders to Captain to go to Manila* といふ場合には邦語では「船長にマニラに行け」と命ずる」と譯せねばならぬ。チャモロ語に於ても略と同様で、ハロゴ(彼、命) イカピタン ヌ。ウフアラグ(ファラグ)——「赴」の自今格) マニラといふのである。ヌはナ、イの連約であるが、此場合のナは二句の連結の用をなすものであるから我とに相當する。又自今格は上記命令法中に説明した通り、第三人稱の命令に用ひられる形であるのである。

## 九、數 詞

現代のチャモロ人は殆ど全部スペイン數詞を——多少變化して——用ひて居るが、本編に説かうとするのは廢用になつた舊數詞である。

原數。チャモロの基本數は左の諸語から成立する。

一(ヒ) ハチャ、又は マイサ

二(フ) フグア。マオリ語ルア

三(ミ) ツロ。マオリ語トル

四(ヨ) ファトファト。マオリ語 フハ

五(イ) リマ。マレ<sup>イ</sup>語及マオリ語 リマ。バラウ語 リマウ又はオ<sup>イ</sup>ム。ソソル語 リモウ。

ポナペ語オ<sup>イ</sup>ウ。ヤツプ語ラル。マーシャル語 ラリム。臺灣タイヤル語 イマガル。

六(ム) グスム。スンダ語 グヌプ。マレ<sup>イ</sup>語 ア<sup>ネ</sup>ム。

七(ナナ) フィチ。ソソル語 フイトウ。マオリ語 フヒツ。

八(ヤ) グアル。バラウ語 ウ<sup>ア</sup>ル。ソソル語 ヴ<sup>ア</sup>ルウ。マオリ語 ヲル。

九(ココ) シグア(シハは複數を表示する語)。マオリ語 イワ。

十(ト) マノト又はフル。マレ<sup>イ</sup>語及スンダ語プ<sup>ル</sup>。マオリ語 ナフル

百(モモ) ガツス。マレ<sup>イ</sup>語及スンダ語ラツス。

千(チ) チャラン

右によるとチャモロ語の數詞は隣接民族のどの語よりも——私はまだタガル語を調べて居らぬが——マレ<sup>イ</sup>語及マオリ語に近い。此系統の數詞はマリアナ群島以北には跡を絶つたやうであるが、私は邦語のイ(五、五十)はリマの畧りの轉化ではあるまいかと思ふ。表に於て見るが如く、此語は色々の形に於

てミクロネシアの東の端から西のはてまで普及して居るのみならず、臺灣にも其痕跡がある。現在では多くの場合十進法が行はれて居るが、此等諸島に於ける原始時代の最大数は五であつたらしく、現にマ  
 ーシャル語では六を三と三（ヅルヅノ）、七を二と二と加一（ヅルヅルイムジュオン）等と稱へて居る。  
 邦語でもム（六）はミ（三）から、ヤ（八）はヨ（四）から同行變化によつて出来た語であることは明白で、最  
 古の原形と認むべきは五（イ）を最大とするのである。

チャモロ語に於て十一以上の數を表現するにはノ（の）及ナガイ——ナ（の）とガイ（有）との連約であら  
 う。邦語の「餘り」に當るものを用ひる。例

- 十一（トヲマリヒト） マノト（十） ナガイ（餘） ハチャ（一）  
 二十（ハタチ） フグア（二） ナ（の） フル（十）  
 二十一（ハタチマリヒト） フグア（二） ナ（の） フル（十） ナガイ（餘） ハチャ（一）  
 三十（ミソチ） ツロ（三） ナ（の） フル（十）  
 二百（フタモモ） フグア（二） ナ（の） ガツス（百）  
 三千（ミチ） ツロ（三） ナ（の） チャラン（千）  
 萬（ヨロツ） マノト（十） ナ（の） チャラン（千）

用例。右の數稱は基本數の外に月日等を計へるにも用ひられるが、生物、無生物、丈量を計算する爲

には特別の接頭語又は接尾語を添付するを要し、且音便による變化を生じて次の如く稱へられる。

	生 物	無生物	丈 量
一	マイサ	ハチヤイ	タグハチユン
二	フグア	フギヤイ	タグフグアン
三	タト	トルギヤイ	タグツルン
四	ファトファト	ファトファタイ	タグファツン
五	ラリマ	リミヤイ	タグリマン
六	グアグヌム	ゴンミヤイ	タググヌム
七	ファイチ	フィットギヤイ	タグフィツン
八	グアグアル	グアトギヤイ	タググアルン
九	サシグア	シギヤイ	タグシグアン
十	マオノト	マヌタイ	タグマオトン
百	ガツス	ガツス	マナボ(ガツス)
千	チャラン	チャラン	タグチャラン

序數を表現するにはイ、ファイナといふ語を冠するのであるが、之が爲に音便の變化が起つて、次の如

く稱へられる。

第一 イ フィナ マナ。又は イ メナ 第六 イ フィナ ハウヌム

第二 イ フィナ フグア 第七 イ フィナ ハウチ

第三 イ フィナ ハツ 第八 イ フィナ ハウル

第四 イ フィナ ハフアト 第九 イ フィナ ハスグア

第五 イ フィナ ハトマ 第十 イ フィナ ハノト

數詞を名詞に連ねる場合にはナ(の)を挿入する。例、タト(三) ナ(の) チャカ(鼠)

魚に限り一をハチチブ、二をアトスガン(双)といふ。二尾以上は フグア ナ アトスガン(二双)、

ウサン(十双)、フグア ナ ウサン(二十双)の如く數へることがある。

「何個づつ」といふ場合には相互的複數の形を用ひる。例、フマチヤ、フマイサ、フマチヤイ(一ツづつ)。

フムグア、フムギヤイ(二ツづつ)。

倍數はファハを以て表示し、之を乗すべき數に接頭(連約)して被乘數に前行せしめる。例、ファハグ

ア(二倍) リマ——五の二倍。ファハウル(八倍) マノト ナガイ ハチャ(十一)——十一の八倍。

## 一〇、意志表示

語は人間の意志を表現する一方法であるが——外に身振、手振、信號等もあるが、之を説くことは本編の目的でないから除外する——多くの場合、唯一つの語のみを以て意志を表現することは困難である。例へばタウタウ(人)というただけではどんな人か、人がどうしたのか、人をどうしようと言ふのか、一切不明であるから、他の語を以て意を補はねばならぬ。さりながら各人勝手に單語をならべたのでは誤解を生じ、意志の疏通を缺く虞があるから、仲間同志の間に自然の約束が生まれて、其排列の方法と順序とによつて一定の意味が了解せられるやうになつた。邦語では之を「語づかひ」といふのであるが、漢字でかけば意志表示法である。——古來此意味に作文、文章等の文字が用ひられて居るが、筆札に重きを置くやうな氣がして、文字もないチャモロ語に對してはことに不適當のやうに思はれるから、私は右の意志表示といふ文字を選んだ。かたくな漢字を好まぬ人には「語づかひ」と訓んで貰ひたい。

チャモロ語ではインドゲルマン語のやうに或る人又は事物を主題とし(主語)、之について記述する(述語)といふ觀念があつたかどうかは疑問で、寧ろ思想の順序に従ふ單なる語の排列に過ぎぬのではあるまいかと思はれる。其故にナナ(母)、ハッ(考)と連ぬれば其で一個の意志表示となつたのであるが、其だけでは「母の考」か、「母が考へる」といふことか不明であり、又ラサス(皮又は剝皮)、ハヨ(木)は「木皮」の意か、「木の皮を剝ぐ」のかといふ疑を生ずる。此關係を明にする爲に語格論中に述べたやうな屈折、活用が行はれるのであるが、尙其外にも イ ラサス ハヨ || 「木皮」、イ ヒナッ(ハッの屈

折——思想) ナ ナナホ(我母) 「我母の思想」といふやうにイ、ナ等の語が用ひられる。此者の關係を表示する語を總稱して私は助語とよぶことにした。

又ラへ(男、夫) ナ バラウアン(妻、女)は「女の夫」とも、「男の妻」とも解釋せられ、シ ホーゼ ナエ(與)というては「ホーゼ(人名)が與へる」といふ意味に誤解せられる虞がある。其故に「ホーゼに與へよ」といふ場合にはナエ シ ホーゼの如く動詞を前に置き、「男の妻」といはうとするにはイ バラウアンナラへのやうに常に支配語を後にするのである。ラテン語のやうに語格が屈折によつて明示せられて居る言語では *filius* (子) *matrem* (母を) *amat* (愛す) というても *mater in filius amat* と順序をかへても差支はないが、チャモロ語ではイ バトゴン(子) ハゴフリエ(愛) シ(冠詞) ナナ(母)の如く目的格を最後に置かねばならぬのである。

右の如き排列の順序を私は語の序列と名づける。チャモロ語の意志表示法は之を上記の助語との二つに盡きて居るのである。

**助語。** 助語の範圍に屬すべき語を西洋流に分類すれば冠詞、前置詞及接續詞である。

冠詞は或る表現語(*prepositive words*)又は其聯語(*phrases*)が一名詞として用ひられて居ることを表識するもので、古はアを用ひたらしく思はれることは既述の通りであるが、現在では専ら「此」といふ意味のイ又は其變形を用ひ、左の三様に區別せられる。

(イ) 普通名詞に對してはイを用ひる。但し第一成音がオ韻又はウ韻の場合には類化によつてエ韻又はイ韻に同行變化する。例

チヨツダ(バナナ)——イ チェツダ。 プグア(檳榔子)——イ ビグア。

二つの名詞より成る聯語フレーズに在つても冠詞は唯一つである。例

イ バトゴン(子) ナ ラへ(男)——男の子。 イ イニナン(光、の) アトダウ(太陽)——日光。

(ロ) 稱號及人名にはシを用ひる。例、シ バレ(教父)。 シ フアン(人名)。

タタ(父)及ナナ(母)にも之を準用する。

(ハ) 山、川、其他の地名、方位等にはイヤを用ひる。例、イヤ サイバン(サイバン島)。 イヤ カタン

(北)。

西洋の不定代名詞にあたるものは、~~ヤ~~モロ語には存在しなかつたが、スペイン語の感化によつて近時は *yo* (一) を冠するやうになつた。但し性による區別はない。例、ウン ラへ——或る男。ウン バラ ウアン——或る女。

前置詞中 *yo* (二)、*as*、*gi*、*gi ne*、*san* の如き *チャモロ* 語固有のものは既に單語概説の項下に示したが、近時は左記のスペイン語の前置詞も普く使用せられる。

*para*, *por*, *con*, *hasta*, *sin*, *contra*, *fuera de*, *entre*

時、場所等を示す語(副詞)にはギ、ギネ、サンを冠することが多い。例、サン カタン(北)——北方。  
ギ プエネ(午後、夕、夜)——午後に(又は夕に又は夜に)。ギネ マノ(何處)——何處から。

接續詞としては既記のナ(の)の外に左記のものを挙げ得る。

ヤ 語を次ぎ又は句を連結するに用ひる。

ヤン 「及」の意で、語と語との接続に用ひる。

エ——又。

バ——或は、若くは。

ヌ 既記の前置詞であるが、邦語の<sup>ニ</sup>に相當する意味に於て句と句とを接続するに用ひられる。但し

自今格の動詞に前行する場合に限る(動詞語法の項下参照)。

ギン、ヤギン——假令。

ナイ——以來、爾時。

アン、アン ナイ、アナイ——「しするに於ては」の意。

アナイハ、ギナイハ、ギゴンハ、アンハ——しするや否や。

ラウ——然れども。

ル——しにも拘はらず。

サ——如何となれば。

カウ 疑を含む語。邦語「ありやなしや」のやに當る。

エステ・ミナ——此故に。

エナウ・ミナ、アヨ・ミナ 其故に。

右の外スペイン語の *antes que, mientras que, después que, entonces, con todo que, para que, mas sea, mas que sea* 等も借用せられることがある。

序列。語の排列の順序は大略次の通りである。

(一) 主格(名詞及代名詞)は原則として述語に先行するが、次のやうな除外例がある。

(イ) 動詞が其活用に接頭形代名詞を用ひざるものである場合には主格たる代名詞は常に之に續行する。例

ツマラヤ(網打てり) ヨ(我)——我網打てり。

(ロ) 疑問句にあつては常に疑を表示する語及述語が先行する。例

ハスア(何) フィナチナスニヤ(彼の行爲) シ タタモ(汝の父)——汝の父は何をなすか。

(二) 直接及間接目的並に作因(アゼンス)たる名詞、代名詞は常に動詞の後に位するが、就中直接目的は最後に置かれる。例

フナエ(我、與) アス(に) ホトゼ(人名——間接目的) ヌ(を) イ ブルマ(ペン)——私はホトゼにペンを與へる。

ニナエ(贈與) ヨ(我) ヌ(に) イ チェルホ(我兄——作因) ヌ(を) イ レプロ(書物)——私は兄から書物を與へられた。

(三) 動詞は左記の場合の外、主格に續行し、目的格に先行する。

(イ) 活用の形式上、主格たる代名詞(短形)が後に來る場合(一)の(イ)の例參照)。

(ロ) 命令法を表示する場合には句頭に位する(動詞語法の項下參照)。

(ハ) 疑問句に在りては常に主格に先行する(右同)。

(ニ) 主格を省略したる場合。例

ガイゲ(在) ギ(に) グアロ(畑)——(彼は)畑に在り。

(四) 形容詞は名詞に先行し、ナを以て連結することを例とするが、次の如き異例がある。

(イ) ナを省くもの。例、イ サントス キルウス——神聖十字架。

(ロ) 形容詞を後に置くもの。此場合には前續語にナの略を添付する。例、イ ガラゴン(犬の)

アバカ(白)——白犬。

邦語の「花赤し」、「水清し」の如きも本初は「花の赤」「水の清」の如き形ではなかつたらうか。此語

法は沖繩先島群島に其痕跡を留めて居る。例へば八重山語では「小膽」をキイム・グマサといふのである。

(五) 指定代名詞も亦形容詞的に用ひられる場合には必名詞に先行する。例、イネ ナ タウタウ(此の人)。アイン ナ タウタウ(彼の人)。但しイネの代りにスペイン語エステを用ひるときは冠詞を添へることがある。例、イエステ ナ ラへ(此の人)。

(六) 副詞的聯語、述語の修飾、副詞句は左の場合の外、句末に置くことを例とする。

(イ) 之に重きを置く場合には句頭に置くことがある。例

ギ テングアン(籠に) グアハ(其有) スニ(タロ芋)。

(ロ) 前置詞的に用ひられ、名詞に先打する場合。例

ボロ(置) ババ(下) イ ギマ(家) 〓 家の下に置け。

チュリ(移) グアト(向) ギ(に) キシナ(厨房) 〓 臺所に運べ。

右の外に色々趣の變つた語づかひがあるが、一々之を擧示することは煩はしいから、カルスツス師が語づかひの演習として掲げた會話例を其儘収録することにする。

附記。私の遺憾とする所は敬語法を茲に記述し得ざることである。チャモロ語は上述のやうに極めて簡單で、代名詞及動詞に特別の敬意を寓するものはないが、尙下級者が上級者に對して談話する場

合には特別の用語又は言ひ廻しを以て敬意を表するのである。カルスツス師は之について何等の説  
明をも與へて居らず、他に論據とすべき資料もないので、私は之を他日の研究に譲らねばならな  
かつたのである。(大正十五年三月)

## 會話例

### 凡例

- 一、冠詞イ及シ並に連結を表示するナ(の)には一々譯をつけぬことにした。
- 二、スペイン語は語釋の次にsといふ字を添へて標識することにした。
- 三、意譯の下に細字で記註してある(一)ノ(イ)、(三)ノ(ロ)等は上記の「語の序列」説明の番號である。本文と照しあはせて排列の方法を知るに便ならしめんが爲である。
- 四、括弧内に細字で記註したのは上位の語の原形である。

○  
ハイエ(誰) ハゴ(汝)? 汝は誰か。

ハイエ(何) ナアンモ(名、汝)? 汝の名は何(といふ)か。

イ ナアンホ(名、我) シ ホーゼ 私の名はホーゼ。

ハイエ(誰) エステ(此s)? 此は誰か。

エステ(此s) アミグホ(アミゴ友、ホ我) 此は私の友。

ハイエ(誰) イエナウ(其)? 其は誰か。

エナウ(其) イ チエルホ(兄弟、我) 其は私の兄弟。

ハイエ(誰) フマチナス(ファチナス爲) エステ(之s) 誰か之を爲せるか。

エステ(此s) シハ(等) フマチナス(爲せり) エステ(此s) 此(人)達之を爲せり。

ハイエ(誰) ルマグセ(ラケセ縫) エステ(此s) ナ マガゴ(衣)? 誰が此衣を縫へるか。 (五)

シ ナナ(母) ルマグセ(縫へり) エステ(此s) ナ マガゴ(衣) 母が此着物を縫うた。 (五)

ハイエ(誰) イレグニヤ(アロク言、ニヤ彼)? 誰が其を言ふか。

ハイエ(何) イレレグモ(云、云、汝)? 何を汝はいうて居るか。

ハフ(何) オンファチナス(汝、爲) 何を汝はなすか。

フボオグ(我、ボオグ筆) イ チヤグアン(草) 我草をむしる。

ハフア(何) フィナチナスニヤ(ファチナス爲、ニヤ彼) シ タタモ(タタ父、モ汝) 汝の父の行爲如

何。 (一)ノ(ロ)

ガイゲ(在) ギ(に) グアロ(畑) 畑に在り。 (三)ノ(二)

ハフ——タイmano(如何様) マサナン(サナン謂)? 何といふか。

マササナン(爲謂々) グアファグ(蓆) 蓆と呼ぶ。

ハフ——タイmano(如何様) マササナン(爲謂々) エステ(此s) ナ アトボル(木)? 此木は何

とらふか。

(三三)ノ(八)

エステ(此s) ナ アトボル(木) マササナン(謂爲) イフィール——此木はイフィールと呼ぶ。

ハフア(何) グアハ(其有) ギ(に) テングアン(籠)?——籠に何があるか。

ギ(に) テングアン(籠) グアハ(其有) スニ(タロ芋) ヤン(及) チャダ(卵) マヌグ(鶏)——籠に

はタロ芋と鶏卵とがある。

(六)ノ(イ)

グアハ(其有) チュバ(煙草)——煙草がある。

タヤ(無) プダア(檳榔子)——檳榔子はない。

ハイエ(誰) プマトマダ(バトマダ打) ハウ(汝)?——誰が汝を打てるか。

ウノ(一s) グ——バラウ(バラウ人) ハバトマダ(彼、打) ヨ(我)——一バラウ人(カロリン人)が私

を打つた。

ハイエ(何) リリエモ(リイ見、汝)?——汝の見るものは何か。

フリイ(我、見) ウン(一s) バジャロ(鳥)——私は一つの鳥を見る。

ハイエ(誰) オンゴフリエ(汝、愛)?——誰を汝は愛するか。

フゴフリエ(我愛) シ タタホ(父、我) ヤン(及) シ ナナホ(母、我)——私は私の父と母とを愛

する。

ハイエ(誰) ギニフリエ(ゴフリエ愛) アス(に) ユウス(神)? 誰が神に親愛か 誰が神に愛せられるか。

ハイエ(誰) マゴフリエ(可愛) アス(に) ユウス(神)? 誰が神に愛せられるか。

シ ユウス(神) ハゴフリエ(彼愛) イ マンマウレグ(善) 神は善(人)を愛す。

ハイエ(誰) ガチヨンモ(共、汝)? 誰が汝と一緒にいるか。

タヤ(無)、グアホ(我) ナ マイサ(一) 無、我が一人。

ホゴ(汝) ナ マイサ(一) 汝一人。

ハイエ(誰) ガチヨンモ(共、汝) マラグ(赴) タナバグ(地名)? 誰が汝と一緒にタナバグに赴くか。

マンギ(マノ何處、ギにの連約) イ セセホ(小刀、我)? 何處に私の小刀があるか。

ガイゲ(在) グエナウ(ギに、エナウ其の連約) 其處にあり。

マノ(何處) ハウ(汝)? 汝は何處に居るか。

グイネ(ギに、イネ此の連約) 此處にあり。

マンギ(何處に) シ タタモ(父、汝)? 汝の父は何處に居るか。

ガイゲ(在) ギ(に) イナイ(濱) 濱に在り。

ガイゲ(在) ギヤ(ギに)、イヤ冠詞の連約) ハメ(我々) 我々の許にあり。

ガイゲ(在) ギ(に) ギマ(家) ユウス(神) 教會に在り。

マンギ(何處に) イ チエルモ(兄弟、汝) 汝の兄弟は何處に居るか。

ガイゲ(在) ギ(に) チエンダ(店) 店に在り。

マンギ(何處に) ガマメ(家畜、我々) ナ ガツ(猫) 我々の猫は何處に居るか。

本文代名詞の項下參照

ガイゲ(在) ババ(下) イ ギマ(家) 家の下に在り。 (六)ノ(ロ)

マンギ(何處に) イ マガゴンマメ(衣、我々) 我々の着物は何處にあるか。

ギ(に) ハルム(内) アポセント(室) 室内に(あり)。 (六)ノ(五)

マンガイゲ(在複數) ギ(に) カウハウ(箱) 箱にあり。

マンギ(何處に) イ レロスホ(時計) 我々? 私の時計は何處にあるか。

マカナ(カナ掛) ギ(に) バデド(壁) 壁に掛けてある。

マンギ(何處に) イ ポーテン(ポート) ダンキユロ(大) 何處に大舟が居るか。

ガイゲ(在) ヒホト(近) イ パンタロン(防波堤) 防波堤の近くに居る。

(三)ノ(チ)ノ(ホ)ノ(ロ)

ハフア(何) グアハ(其有) ギ(に) カウハウ(箱)? 箱に何かがあるか。  
マガゴ(衣) ヤン(及) サラビ(錢)。

バラ(s) —— マノ(何處へ) ハウ(汝)? 汝は何處へ?

フハナウ(我、行) グアト(向) ギ(に) ランチョコ(烟、我) 私は私の畑に行く。 (六)ノ(ロ)

マラグ(赴) グアト(向) グアム グアムに行く。

フハナウ(我、行) グアト(向) ギヤ(ギ、イヤの連約) ハメ(我々) 私は我々の家に行く。

フハナウ(我、行) ギイエ(ギに) ユ(其の) 連約) カタン(北) 私は其北に行く。

ウメグイハン(エカイハン漁) ヨ(我) 漁せり。 (一)ノ(イ)

フハナウ(我行) グアト(向) アス(に) ペドロ(人名) ペドロの許に行く。

バラ(s) —— マノ(何處) エスタ(有s) フマナウ(ハナウ行) シ フアン(人名)? フアンは何處

に行つたか。

動詞活用の項下参照

バラ(s) —— マノ(何處に) マンハナウ(行複數) イエナウ(其) シハ(等)? 其人達は何處に行つ

たか。

バラ —— マノ —— ナイ(何處に) フボロ(我、置) エステ(此) ナ コスタト(袋)? 此袋を何處に

置かうか。

フアタチヨシ(爲立) マヨ(其) グアト(向) サン(に) ヒロ(上) イ サトゲ(床) 其を床の上に  
 彼方に立かけよ。

バラ—マノ—ナイ(何處に) ウタチユリ(チュリ搬) イ ボーテ(舟) 我と汝と此舟を何處に  
 持つて行かうか。

動詞活用の項下参照

グアト(向) イ カマリシ(舟庫) 舟庫の方へ。

ギネ(自) マノ(何處) ハウ(汝)? 汝は何處から?

ギネ(自) ハガト(地名) ヨ(我) ハガトから。

(六)ノ(イ)

ギネ(自) マノ(何處) ユヘ(其)? 其人は何處から? 其は何處の人か?

タウタウ(人) アガニヤ(地名) アガニヤ人

ギネ(自) マノ—ナイ(何處) オンママイラ(マイラ來)? 何處から汝は來るだらうか。

動詞活用の項下参照

ギネ(自) リチャン(南) ヨ(我) 私は南から。

(六)ノ(イ)

ギネ(自) イヤ(冠詞) ヒタ(我汝) ヨ(我) 私是我々の家から。

ギネ(自) マノ(何處) シハ(彼等)? 彼等は何處から?

マンギネ(自複數) タナバグ(地名) シハ(彼等) 彼等はタナバグから。(註) 副詞を複數にしたのはめづら

しい例である動詞代用と見るべきであらう。

ナイアン——ナイ(何時) マト(到着) ハウ(汝)? 汝は何時到着したか。

マト(到着) ヨ(我) ニガブ(昨日) 〓私は昨日来た。

ハフア(何) ナ ホラ(時s) マト(到着) ハウ(汝)? 汝は何時ついたか。

ギ(に) タロアネ(正午) ギ(に) プエンゲ(午後)。

バゴゴハ(メゴハ今) 〓只今。(註) 疊語の一異例。

ナイアン——ナイ(何時) マンマト(マト到着) ハムヨ(汝等) ギヤ(ギ、イヤ冠詞) ルタ(地名)? 汝

等は何時ルタに到着したか。

ナイアン——ナイ(何時) マト(到着) ハウ(汝) マギ(此處に)? 汝は何時此處に來たか。

ナイアン(何時) ウグアグアト(クアト向) シ ホーゼ(人名) ラウラウ(地名)? ホーゼは何時ラ

ウラウに向うたらうか。(註) 副詞クアトは疊頭により動詞として活用せられたのである。

アグバ(明日) ギ(に) タロアネ(正午)。

クアント(幾s) ナ ビアへ(回) 一グアハ(其有) エスクエラ(學校s)? 學校は幾回(週に)ある

か。

カダ(毎s) デア(日) 〓毎日。

ハフア(何) ナ ホラ(時s) ナイ(爾時) マツツフン(ツツホン始) イ エスクエラ(學校s)? —— 學校  
は何時に始まるか(始まりなすか)。

ア・ラス・オチヨ(八時に)。

ハフ(何) マラゴモ(希望、汝)? —— 汝の望は何か。

グアハ(其有) ハフア(或物) バラ(s) マベンデ(賣連體形) 或る賣る物がある。

動詞語法の項下参照

ドス(二s) マヌグ(鶏) ヤン(及) サイス(六s) チャダ(卵) マヌグ(鶏) —— 鶏二及鶏卵六。

クアント(幾s) バリニヤ(ヴァレル價s、其)? —— 値段は何程? 又はクアント —— いくら?

ドス(二s) マヌグ(鶏) ウン(一s) ペソ(貨幣の名)、 サイス(六s) チャダ・マヌグ(鶏卵) ドス

(二s) レアレス(レアル貨幣の名)。 —— 鶏二羽は一ペソ、 鶏卵六個は二レアル。

クアント(幾s) ナ タウタウ(人) マンマト(マト到着) ギ(に) ゴレタ(帆船)? —— 帆船で幾人つ

いたか。

トレインタ(三十s) イ(及s) サイス(六s) —— 三十六人。

ナイアンナイ(何時) タロ(歸) —— マンハナウ(ハナウ行)? —— 何時歸り行くか。

ア・キャンズ・ド・フェブレロ(二月十五日s)。

ナイアン —— ナイ(何時) オンタロ(タロ歸) グアト(向) アガニヤ(地名)? —— 何時アガニヤに歸るか。

アン(時) モンハヤン(了) イ チョチヨホ(仕事、我) シハ(等) ギ(に) オトロ(他s) メス(月s)  
——次の月私の仕事が済んだなら。

クアント(幾s) ナ チエムポ(時s) ナイ(以來) スマガ(サガ住) ハウ(汝) ギヤ(ギイ、ヤの約)  
サイバン(地名) ——何時からサイバンに住んで居るか。

クアント(幾s) イ リネカニヤ(高さ、其) イ ギマ(家) ——家は其高さ幾許?  
イ リネカニヤ(高さ、其) オチヨ(八s) メトロス(米突s) ——其高さ八米突。

クアント(幾s) イ インアナコニヤ(長さ、其) ユヘ(其) ナ ハヨ(木)? ——其木は長さ幾許?  
(一)ノ(イ)、(五)

サイス(六s) ブラス(ブラザ尋s) イ(及s) メデオ(半s) ——六尋半。  
クアント(幾s) イ チナンキユロニヤ(大さ、其) イ バボル(汽船s)? ——汽船の大さ幾許?

ハフ——タイマノ(如何様) ハウ(汝)? ——御機嫌如何。  
マウレグ(善) ヨ(我) ——我宜し ——御蔭さまで……

マリニグ(患s) イルホ(ウロ頭、我) ——頭痛がする。  
ハフア(何) チエトノトモ(傷、汝)? ——何處が痛むか。

プチ(痛) イ チヤンホ(ツヤン腹、我) ——私は腹が痛い。

ハフ——タイマノ——ナイ(如何して) バイフカフロ(カフロ登) ギ(に) アトフ(屋根)?——私はどうして屋根に登らうか。

動詞活用の項下参照

バイフカフロ(カフロ登) ギ(に) グアオト(梯子)——私は梯子で登らう。

ハフ——タイマノ(如何様) マタンメ(爲、タンメ植) イ チュバ(煙草)?——どのやうにして煙草を植えるか。

ギネ(自) ハフア(何) マンマファチナス(爲、ファチナス作複數) イ カラヘ(釜) シハ(等)?——此等の釜は何て作るか。

マンマファチナス(爲、作) ギネ(自) イ リログ(ルログ鐵)——鐵で作る。

ニ(ヌ、イの連約) ハフア(何) オンツギ(汝、書)?——汝は何て書くか。

フツギ(我、書) ニ(にて) プルマ(ペン)——私はペンで書く。

バラ(s)——ハフア(何の爲に) スメトベ(セトベ用) イ ラピス(鉛筆)——何の爲に鉛筆を用ひたか。

ギネ(自) ハフア(何) マファチナス(作爲) イ リサヨ(頸環)?——頸輪は何から作るか。

ギネ(自) ペトラス(光珠)——光珠(ビイドロ珠)で。

ハフア(何) マファチナス(爲、作) ニ(ヌ、イの連約) エスボンハ(海綿)——海綿で何を作るか。

ハフア(何) ナ プロベチヨ(役) イ エスポンハ(海綿s)？——海綿は何の役に立つか。

マウサ(マ爲、ウサ用s) イ エスポンハ(海綿s) パラ(爲s) ウマフナス(アフナス淨拭) イ ビサラ

(石盤)——海綿は石盤を拭く用をなす。

サ(理由) ハフア(何) オンママイラ(汝、爲、來) マギ(此處に)？——汝は何の爲に此處に來たか。

マト(到着) ヨ(我) パラ(爲s) フファチヨチヨ(我、爲、仕事)——働く爲に私は來た。

サ(理由) ハフア(何) ナ オンフチユム(汝閉) イ ベンタナ(窓s)？——汝は何故に窓を閉めるか。

サ(故) フモルム(ハルム内) イ イニナン(光) アトダウ(太陽) ギ(に) ギマ(家)——家に日光を入

れん爲に。

ハイエ(誰) ガイ(有) イヨ(屬) エステ(此s) ナ ラピス(鉛筆s)？——此鉛筆は誰に屬するか。

イヨコ(屬、我)——私のである。

ハイエ(誰) ガイ(有) ガ(家畜) エステ(此s) ナ ハブイ(豚)——此豚は誰の家畜であるか。

代名詞の項下參照

ガマメ(家畜、我々)——我々のである。

マノ——ナイ(何處) ハルム(内)？——どこの中に？

ギ(に) ハルム(内) コスタト(袋)——袋の中に。

サン(に) ヒロ(フロ上) イ ラマサ(机) 机の上に。

マノ——ナイ(何處) ヒホト(近)? 何處の近くに?

ヒホト(近) シ ホーゼ(人名) 〓ホーゼ(の家)に近く。

カタナ(北) アス(から) ホーゼ 〓ホーゼ(の家)から北。

ギ(に) エンタロ(間s) ハフア(何)? 〓間に何(がある)か。

ギ(に) エンタロ(間s) イ アチヨ(石) シハ(等) 〓間に石がある。

ハフア(何) ナ ポーテ(舟s)? 〓どの舟か。

イ ビホ(古) 〓古いやつ。

ハフア(何) シハ(等)? 〓どれ(複数)か。

イ マンダククロ(大複数) 〓大きなやつども。

ハフア(孰) シハ(等) ナ ドス(二s) 〓どの二つ?

イ マンデキキ(小複数) 〓小さい物等。